

第拾六號

文明之母第十六號目次

本誌ハ每月二回三日十八日に發行す
本誌ハ前金に非れば發送せず
本誌の定價は一册金六錢十二册半年分金六十八錢廿四册一年分金一圓卅錢全國無遞送料
本誌の廣告料は「五號活字廿三字詰」當り左の如し
壹行 (壹回) 金八錢 (二回以上) 金七錢
三十行以上 金七錢 金六錢
六十行以上 金六錢 金五錢
本誌の見本は郵劵六錢を送らるれば呈す
本誌代金御回送の節ハ內國通運早遞便又は東京郵便局へ御振込被下度郵劵代用は一割增
本誌の前金將に相切れんとする時ハ其卷の宿所姓名を朱書して發送すべし

版權所有

主筆 大矢森之助
發行兼編輯人 中村一 東京深川區諸町十三番地
印刷人 小西石造 東京深川區仲町八番地
發行所 東京日本橋區大傳馬町二丁目貳拾貳番地 生文社

特別大賣捌
東京本郷區元富士町 盛春堂
仝日本橋區小網町四丁目 信文堂
仝京橋區三十間堀一丁目 東明堂出張店
仝神田區佐柄木町 東海堂
仝日本橋區本石町四丁目 指金堂
埼玉縣鴻巣町 長島本店

大賣捌
埼玉縣越ヶ谷町 協立舍
仝所澤 尚文堂
仝浦和町 文華堂
仝熊谷町 近榮堂
仝川越町 水村岩三郎
仙臺國分町 三友社
越中富山 眞田啓二郎
仝 大橋甚吾
越後長岡 目黑十郎
仝 松田周平
秋田 本間金之助
神奈川 吉川伊兵衛
名古屋 永樂屋
大坂 松村九兵衛
仝 前川善兵衛
和歌山 平井文助
出雲松町 盛進堂
熊本 長崎二郎
仝千反畑 文明堂
群馬前橋 黑崎長三郎

新年

十六日今様始御題

たちはじめぬるかなたの月
うちなびきたるあしかきの
つきせぬちよのいろみえて
としのはしめにたちならふ
ゆきげのくものあはれてく
しられぬまにたかねまで
松のみどりのあをふかみ

ことしはじめて
乃とのをやま

弘綱

文明之母第十六號

明治二十三年一月三日發兌



○嗚呼二十三年の春は來れり！

「小池春破玉玲瓏、聲觸簾鈎漸好風」、嗚呼また春は來れり！祝福なる新年は來れり！夫れ年月は何時も同じきものなり、今年の一年もまた十年前の一年と同じきなり、其の一年たるに於いては少差なきなり。今年の一月もまた百年前の一月と齊しきなり、其の一月たるに於いては相違あらざるなり。春亦然り「春度春歸無限春」、斯くの如きのみ、其の度る春も歸る春も同じき春のみ。然れども是れはこれ歷數家の肉眼より觀察したる推步たるに過ぎず。社會的歷數家の心眼より之を觀れば、大に然らざるものあるなり、乃ち一年決して同じからざるなり、一月決して同じからざ

るなり、春亦決して同じからざるなり。啻に相同じからざるのみならず、時としては彼の一年と此の一年と、彼の一月と此の一月と、及び彼の春と此の春と、雲壤月鼈の差違あることあるなり。試に問はん今年は如何、今年の春は如何。此の間に接せば、誰しも大聲して答へん、今年は明治廿三年なり、今年の春は明治二十三年の春なり實に神武天皇紀元二千五百五十年、の新年なりと。

然り、實に然り。然らば則ち知るべきなり、今年の春は實に容易ならざる春なるを、例年の春と同一視すべからざるの春なるを、吾人は今之を説破するの要を看ず、唯左の數言を費して已まん。いつもの春は小童の指屈へて待つあるに過ぎざるも、今年の春は成人までも指屈へて待ちつゝありたるなり。通常の春は社會一部の人が數日前より待つあるに過ぎざるも今年の春は社會全部の人――否實に現社會にあらず、已に北邙一片の煙と化し去りたる人々までも十數年前より遲ちつゝありたるなり。

嗚呼、斯く待設けたる春は至りしなり、我が讀者諸君は今此の駕を廻らし來りたる東帝に對し、何如なる語を以て之を迎へんとするか、何を以て

之を饗せんとするか、諸君が今嘗むる所の屠蘇の味は如何。

想起す、吾人が二十一年十一月に於いて始めて此の文明之の母を刊行するや、或人れ之を贊したり、或人は之を駁したり。而して之を贊するも之を駁するも、齊しく吾人に對する摯情に外ならざりしなり、故に吾人も亦之に對して同じく感謝したり。吾人は之に感謝して尙熱心に文明之母の生長を計りたり、竊に自ら期する所あればなり。夫れ天象猛變の時には老鍊なる舵師を要し、暗洋重霧の處には赫灼なる燈臺を要するなり。我が邦は今天象猛變の時に際せり、暗洋重霧の處に在り、然り而して老鍊なる舵師何れの處にかある、赫灼たる燈臺又何れの處にかある。吾人は素より老鍊なる舵師たる能はず、然れどもせめては危を避け安に就かしめ、船体をして乘客をして安全に彼岸に達せしむるの一助となさんことと期す。吾人は又素より赫灼たる燈臺たるを得ず、然れどもせめては一道の螢火ともなりて、咫尺の間の暗礁を照らし、他の舵師をして水手をし

て、船体と乘客とを彼岸に達せしむるに寸功あらんことを期す。

斯く期する吾人は、今や此の二十三年の春を迎へたり、其の感情は轉た深からざるを得ず。吾人は實に一層筆尖を鋭くし、一層觀察を敏にし、一層精確に、一層周到に、一層眞實に、一層明快に、自己の胸憶を攄へ、社會の現象を論評せざるべからざるを感ぜ——血液の循環する限り、生息の通はん限り、言論の範圍の許さん限り。

嗚呼今來れる新年は實に容易ならざる新年なり。吾人ハ之を目して勿論目出たき新年なりといふ、然れども又之を目して面白き新年なりといふ、而して更にむづかしき新年なり、おそろしき新年なりといふ。吾人嘗て古今東西の歷史を繙き、夥しく目出たき新年あるを見る、又夥しく面白き新年あるを見る、又夥しくむづかしき新年、おそろしき新年あるを見る。然れども斯く目出たき、面白き、むづかしき、おそろしき新年の甚だ少きと見るなり。然り而して此の新年ハ今や普く我が千門萬戸を見舞ふ

たり。見舞はれたる讀者諸君が、今嘗むる所の屠蘇の味は如何。

今や吾人は此の新年に於いて、机に向ひ墨を磨し、筆を握ッて紙を伸ばしたり、而して自ら如何なる事を記し、如何なる事を論せんとするを知らず。然りと雖も決して屠蘇に醉へたるにあらざるなり。而して左の一語を絶叫して讀者諸君の甘心せらるべきを信ず。

嗚呼二十三年の春は來れり!!!



○女子手藝論

中川重麗譯

竈の邊、焚火の影に坐を占めて、濃き紫の羊毛を、紡ぐ乙女の其の眼光、憐にも愛くしや。（希臘ホーメル氏）

玆に論歩を進めて、女子の實地的の職務より精神的の本分に移らんと

欲すれども、其の間に先づ女性の手工に就き、少しく說かざるべからず。

蓋し手工の事たるや、既にホーメル氏の時に於いてすら、人の甚だ貴重したるものにて、實に紡錘と縫針の業なり。今は工業の進步著しく既に女子手藝の領分までも其の影響を來し、方今の女子は彼の希臘及び古日耳曼の婦人の如く、手自ら梭を飛ばし針に絲して、家眷の衣服を製するの勞なし。從ッて女子の手工の神聖なる意味は、殆ど消滅に歸し去れり。頭を回して往古を懷へば、女子の室內には手工の聖光を帶び、女王と雖も深宮に坐し、侍女に圍繞せられて人生第一の此の必要に從事し給へり。是を以てハラス神（帶職の美術神なり）が敎へ且つ護る所の手工の精巧は、今日に於いて敢て之を缺くべからず。是れ亦各女子の習ふべき事物の範圍に在るものなり。何となれば手工は實地的敎育の最も必要なる一部分なればなり。裁縫を解せざる婦人は、其の本文を全ふし得ざること、庖厨の業及び他の家務と解せざる者と敢て異同あることなし。共に嫌ふべき缺點なり。蓋し眞正の美情を發達せんと欲すれば、何事に就いても缺點なきを要す。故に妾を以て之を觀れば、精巧なる刺繡をなす纖手なりと雖も、若

し必要の裁縫を爲し能はざるに於いては、妾が眼中には一も價値ありとは認めず。縱しや又裁縫を爲し得るも、尙は未熟なるに於いては、婦人の爲に悲まざるべからず。凡そ世の中に女子が其の衣裳と、其の衣裳の美を全ふせんと欲するより起る瑣末の必用をも、他人の手を借らざれば爲し難き程不自由なるはあらじ。婦人たり令孃たり、自己の手を以て爲さざるを得ざるの位置に在りながら、自ら之を爲さず、他に托して爲さしむるは、抑も何といふことぞ。妾は此の種の人を見る毎に轉た感慨に勝へざるなり。女子は手工に巧なる資性あり、此の資性は縱ひ藝術の低き階級に屬するものなりと雖も、亦其の類に應じて觀るべき技藝と爲し得べければ、眞實完全の敎育修養を得んと欲する女子に在りては、決して等閑に附し去りがたし、必ず堅固なる基礎に據りて學ぶべきなり。

縫物と編物とは異日精妙の手工を爲すに缺くべからざる豫習なれば、其の敎授は寧ろ嚴なるを要す。蓋し此の手工に熟練せる腕は、亦能く他の女工に於いて巧なるを得べく、又敎導宜しきを得、且つ能く勉むる女子は其の體力既に十分に發達し、他の重大なる家務を執るに足るの時期に

達するまでに、針絲運用の困難にも十分に打勝ち得らる可し。　今尙は女子の學校には極めて歎息すべき缺點あり。　即ち一は小學校に於いて編物、縫物、補綴等女子に喫緊なる手藝の敎授を缺くこと、一は尋常の女學校及び高等の女學校等に於いて手藝の課は設けありと雖も、然れども不行屆の有樣なる事是なり。　現に中等人種の少女にして一足の靴下を編み、一條の笹縁を着くることさへ爲し得ずして學校を退く者、十中八九の多きを常とす。　此の種の女子は唯無益の押繪を爲し得るのみ、翫弄の細工をなし得るのみ、手には一物他の業なし。　而して此の少女は間もなく人の妻となり、小兒の衣服は固より、良人の衣服、我が衣服までも裁縫せざるべからず。　要するに一家の大切なる本務と負擔せざるべからず。　然るに彼等は毫も裁縫の事を解せず、豈能く此の本務を全ふするを得んや。

上文に寫し來りし敎育不完全の想像畫は、尙は幾分か富める人種の事なれども、一層階級の低き部分に着眼すれば、其の摸樣更に悲しむべきの觀ありとす。　彼の富めるものは此の如き場合に賃錢を拂ふて針婆を雇ふを得べく、或は裁縫師をして工を爲さしむるを得べしと雖も、此の階

級の低きものに在りては、家事の萬端皆婦人の一身に蝟集す。　實用の伎倆あるに非ざれば、誰か能く此の大任を負ふべきや。

他の諸國即ち阿蘭陀、瑞西、佛蘭西、及び英吉利の如きも、獨逸に比ぶれば女子の手藝教育は進歩せり。　獨り獨逸に於いて女子の本務の此の緊要なる事件にして、教育者の慧眼に漏れ、今日まで忽諸に附し去りしは誠に咄々怪事なり。　然りと雖も目下處々に此の議論囂然として、人皆此の文明の一瑕瑾を指點し、鞠躬盡瘁するに至りしは、國家の爲に賀すべき事にて、將に各地方女性の運命は大に更革すべく、遂に此の事は普及の主義となり、貴となく賤となく、總て女子の學校に於いて實行せらるゝに至るの日も既に遠きに在らざるを知るなり。

今此の主義を簡明に述ぶれば、手藝教授は學校に於いて他の各學科と一樣に緊要必須の者と認め、正當の教系に從ひ之を教授する女子學校にあらざれば、一も存在せしめずといふにあり。　而して茲に正當の教系といふ所以は、從來此の科を必要視せず、從ッて種々不適切なる樣に之を課し、事皆隨意に出でしと以てなり。　婦人は固より學校の教師と雖も、動

もすれば女子の手藝に巧なるを視て、之と女性の天稟とす。是れ謬見の甚しきものにして、手藝教育の發達と妨ぐる大なるものと謂ふべし。

右の如く女子の手藝に巧なるは、其の天稟に出づるならんには、誠に幸福の至りなれども、決してさることなし。是を以て適切なる學則と遵奉して、十分に修業せしめざるべからず。蓋し人類の地上に生るゝや、身に半寸の被服を着けず。是れ婦人の手を待ッて衣を得んと欲するにあらずして何ぞや。故に婦人の手には衣を製するの術と敎ふべきこと無論なり。太古に女神の天降りしも畢竟地上の乙女に手藝を敎へんが爲にして、彼のパラス、アテナ(希臘の女神)はオリムプより天降り、フルダ女神(獨逸の女神)はワルハルより降臨せしこと、世の口碑に存する昔話なり。今や既に有識の男子、聰慧の婦人世に出でゝ、手藝敎授の方法を論議し、各學校にても此の法規課程に準じて敎授するに至りたり。されば手藝敎授の奬勵の必要なるは復た疑ひなく、唯神力の猶は未だ此の眞理をして普及隆盛の運に至らしめざるを憾むのみ。

思ふに此の心ある婦人と雖も、未だ悉く自家の少女の爲め、一國の女子

の爲め、此の大切なる問題に充分の意を用ひざるが如し。若し夫れ女性の生活に就き、敢て貴賤の別なく、手藝の能力發達に心を用ゐざること猶は今日の如くならんには、彼の「婦女の眞正の本務」てふ美麗なる一語は、抑も何を表するの語なりや。此の一點に相對しては我々一樣に平等均一なるべきに、其の教育を重んせざること猶は目下の如きは實に解すべからざるなり。

此の問題を果たさんと欲すれば、更に善良の手藝教授を施すに隨伴して、圖案の、教授も亦一變せざるべからず、圖畫學は實に將來に女子小學校の缺く可からざる一技藝たり。蓋し人もし希臘の女子が衣服を裝飾したる畫紋の刺繡の巧妙にして、我々の常に摸範と仰ぐを知らば、是れ亦パラス、アテ子の授け給ひし一藝たるを推知すべきなり。

力役社會の女子に在りては、衣服を裁製するの術は其の主要の務めたること敢て論を俟たず。然りと雖も此の人種すら、猶は衣と製するの術に巧なる者甚だ少し。斯かる容易の業にさへ不快を感ずるの女子の多きは、抑も復た怪むに足らず。何となれば、彼、等、の、眼、は、正、し、く、尺、度、力、と、恰、

好の理解と習慣とを積まざればなり。中等人種の女子の如きも尚は此類の人多し。誠に浩歎の至なり。是實に諸學の教授の缺たるに職由せずんば非ず。之に反して男子の工藝的に關しては、其教育も既に普及し各都府に於ては固より、田舍の職工學校に於てすら、其の生徒は既に石工となり、又大工となるに十分なる圖畫を製し得ること眞に驚くに堪たる者あり。然るに今日は大人或は肥大の人の爲に衣を裁し、明日は小兒或は痩小の人の爲に服を縫ざる可らざる女子にして、却て圖畫の事は是亦天禀に因る者なりとの妄想を以て、其の修業と擯斥し、漫に畫學は無益の業なり、毫も必要なしとするものゝ多きは、實に大なる謬見ならずや。世の多くの男子は其の襦袢の類の裁縫だも、之を其の妻に托せず、擧ッて裁縫匠に托するは、怪しかる次第なりと雖も、彼等は皆曰く、婦人は衣服の恰好を解せずと、誠に至當の言と謂ふべし。然れども何が故に婦人は之を解せざるや、蓋し終には世人が此の眞の原因を曉り、女子の眼の尺度力と恰好の理解如何に就いて、修業の不完全なるを補はんと欲するに至らん歟。

既にフレーブエル氏の創設に係る彼の幼稚園にては、此の基礎を置くの

趣向あるに非ずや。

されば此の基礎は小學校の更に進んで其の開發を促すべきは順序の當に然るべき所なり。是より妾は此の特殊の事を姑く措き普通の問題に歩を退け之が觀察と下さんとす。獨逸の婦人社會には手藝の業盛にして、尚ほ非常の勉強と熱心とを以て、男子の世界の靴下を悉く引き受くるの勢あり。是れ實に腦力を要すること極めて少き手藝にて、大抵婦人は無二の業とし之を愛し、却て他の嚴正なる手藝を嫌ふに至れり。固より敢て咎むべきにもあらざれども、妾は大聲疾呼して之と禁遏せんと欲するものなり。何となれば婦人は此の業に耽るの弊ありて、既に已に必要の境界を越ゆればなり。必要の區域にありてこそ此の業も貴重なれ、既に必要の限を越せば、却て歎息すべき事と謂ふべし。天よ天よ、尚ほも靴下に戀々し、此の編物の外一切の事物を棄てゝ顧みざる婦人を斥け給へよ。天よ天よ、我が工業の進歩の爲に、兒戲に等しき尺大の編物に日を送る無益の勉強を擯け給へよ。此の如きものは今は機械ありて一層廉價に一層美麗に製し得るなり。之に反して世には恰好よく裁縫せる襦袢の類を産する機械なし、雪白又は五彩にして工夫の微

妙なる編物を出だし、又身體に適合せる衣服を產する機械なし。蓋し婦人の手藝は此の方針を取ッて進まざるべからず。此の主意に區域を限らざるべからず。窓帳の補綴、卓掛の修繕の如き兒戲に類する業は總て眼力の既に衰へたる老婆の手に一任して可なり。朦朧の眼尙は能く之を辨ずべく、枯燥の手尙は能く之を爲すべきなり。

（未完）



○結婚の栞

奇玉散人

結婚は生涯の大事、夫婦は一生の朋友です、粗忽な結婚をすれば生涯の泣きです、六十年の饑饉です。嗚呼、之を惟へば輕卒なことは出來ません、一時の誤りより六十年の不作……イヤ六十年で濟むのは未だ輕ろい、事によれば子孫末代迄の不作の本……倍注意すべきは妹脊の契り―」。私はま

だ獨身です、御令閨が御座りません、イヤ何處かに入らせらるゝに相違ないが、未だ引き合せを致しません、ト言ふて未だ速ぐ年でもありませんから、差し當たり望しいとも思ひません、が生涯獨身で居る譯にもまゐりますまい、何故かと仰しやい、先づ男女の結婚がなければ人類の種が盡きます、日本帝國の民族が續きません。サレバ第一愛國の主義に戻る、第二に父母に對して不孝である、父母は我子の結婚したのを見て、始めて安心します。父母と言ふものは有難いもので、能く子の心配をして呉れます。一体父母は我子を能く敎育して一人前の人間にして、イザ是で社會に立つて獨り歩きが出來ると云ふ事を見屆ければ、夫で十分義務が濟んで居る。が夫では未だ安心しません、「アヽ我子もあれ迄にして置けば最早心配はないが、シカシ獨身で居る中は未だ本統に安心はならぬ。アヽどうかして早く良い配偶を貰ふて遣りたいものじや」。ト是が父母の第一番の掛念です。何故でせう？父母は既に生涯の大事を濟した者です、六十年の幸不幸も一々能く經驗して居ます、ソコデ若し御自分達の配偶が悪かッたならば是迄にモウ種々な不幸不愉快に逢ふたに相違ありません。　サ

スレバ、勢斯樣な考が出て來ます、「嗚呼配偶ばかりは良なければイカン、決して粗忽に結婚する者ではない、ソレにつけても子供には是非「……」此考は必ず出ます、假令又御自分達の配偶が良くて、家內安全富貴萬福と云ふ境界に居るにせよ、不良なる配偶から出來る惡い結果は世の中に澤山手本があります。ソコデ其不幸と自分の幸運とを引き較べて見て、益々前と同樣な考を起します。偖斯樣な考が起ッて見ると、我兒に全で結婚の權利を與へる譯に參り兼ます。ナゼなれば我兒は未だ經驗が少ない、夫故妻を登用するときの試驗問題の出し方が惡い、ヂヤに因て經驗の多い父母が數十年間研究し得たる智識の蘊をひもときて、我兒の參考に供したい、サテ此供したい念が盛になりますと、終には壓制的の結婚となります、即ち我兒に相談なしに親々どちの得心で良い加減に取り極めます。シカシ是はチト嚴し過ぎる取計ひです。之では却て我兒に不幸を與へるものです、何故なれば父母のお氣に叶ふても息子の氣に叶はぬ嫁子もあれば、娘の氣に叶はぬ婿子もあります、氣に叶はぬ配偶は到底も倶白髮の妹脊れ契られませぬ、夫故夫婦を撰擇るときは是非共其當人を試驗係

の主任とせねばなりません。シテ父母は其傍で充分助言を與ふれば宜しい、是が即ち眞の自由結婚です。サルヲ近頃の若者どちは自由結婚の意義を濫用して、自分一人にて撰擇の權利を握らうと致します。が之はいけません、私は極不贊成です、尤も側に父母が附て居れば丸で打任かす氣遣もありませんから、危險い事もありますまい。シカシ世の中には隨分又氣遣はしい事もある、現に私の知て居る或る女學校にありました。此の女學校は隨分高等な位置にありまして、日本では先づ一二を占めて居ります。此女學校に石川縣地方から來た一人の生徒がありましたが、來年三四月頃は最早卒業するといふ高位置サテ皆人の知り玉ふ如く日本でも西洋でも高等敎育を受くる女子には誠に美婦人が少いものです、否寧醜婦人が多いものです、トコロが此婦人……容色が先づ十人並と思召せ、サア鳥なき里の蝙蝠です、群羊中の一虎と云ふ氣取で、ツーンと澄まして居るから、見る人々は皆爪彈きをする、斯る氣風故此婦人、お心ばへもズッと高尙にて、常に本邦結婚法の失を嘆じ、頻りに自由結婚の利を唱へて居ました。然るに其鼻先きへ向けて國元からの姻談狀、「其許も最早年頃なれば、い

ぬる日去る人の周旋に任かせ某方へ結婚の約束いたし候、兩親の考にては至極相應と認め候まゝ、其許も承引之れ有り度候」。娘は見るより非常な立腹、誰れあらう今日本にて最高等の教育を受けたる妾とも言はるゝものが、いかでオメ〳〵と田舍漢風情に嫁すべき、ト軈て硯引き寄せて、世も次第に文明に進み頻りに自由結婚の利を主張致し候折柄、イカニ御兩親なればとて小女に一應の御相談もなく、矢庭に御取極め遊ばされ候ハ情なき御取計に候、小女は幸ひ御兩親の御教育により聊か物事の善惡も辨まへ居候まゝ、兼々より結婚の儀は御兩親の御配慮を勞せず、小女自身に取計らへ申すべき心組に候得ば、此度の結婚の儀は是非共御破談成し下され度候」。父母は見るより非常な驚き、仲人は困る先方は怒る、余程の混雜で遂に破談したさうですが、サリトは又此娘余まりの御英斷かと思はる。　イカニ其身に學識があればとて、社會上の經驗は中々父母には及びません、父母の認て善いとする所は大抵間違はありません、誰か可愛の娘を片附くるに無茶な所へ約束しませう、サレバ此娘も一應は其樣子を糺して見ねばならぬ所……。

第三の結婚の必要は、自分の幸福と快樂を求めんが爲です、凡そ嬉しいにつけ悲しいにつけ、之を分つべき相手の無い程淋しい事はありません。其上又家事向きは夫婦でなければ齊はぬものです、男世帶は兎角不作法で又不經濟な事が多くていかぬ。殊に女世帶は能くまとまりがつかず社會に立て胡魔化され勝です、兎に角雙ふものが双はねば家の繁昌は望まれません。

右の三箇條からして私も是非妻を求めねばならぬといふ念が起りました。然し差迫ッてから、サア貰ひたい、サア周旋して下さいと言ふて俄かに淺草の觀音樣や上野の公園を尋ねたと云ふて、サウ容易く見當るものではありませぬ。又左樣にして見當てた妻では、到底六十年の友とは致し難い、夫故妻を求むるには、余程前々から心懸て充分探りを入れてからでなければいけません。

ソコデ私は先頭から妻女の撰擇方といふ問題で、妻とすべき婦人に備はらねばならぬ所の資格に就いて研究しました。トコロが腦漿の中で錬り返した結果が左の如くです。

第一、身體壯健にして且つ充分成熟せるもの、

第二、近縁ならざるもの、
第三、道徳完全なるもの、
第四、學識藝能あるもの、
第五、容貌美麗なるもの、

右の五箇條を標準として妻たるべき婦人を検定したならば、充分の事と思ひます、之を言ひ換へて見れば、右の五箇條を完備せる婦人は私の理想上の模範(Ideal type)です。即ち身體が壯健で、年頃がよくて親類でもなければ一家でもなし、愛情が厚く操が正しく、又學識があッて藝能に巧みで、能く夫を扶け能く子を教育し、加之に其顔貌は小野の小町とパテー嬢とを『折衷したと云ふ美人……サア斯樣な美人があればだがコンナ御婦人は世の中には決して無い、ソコデ勉めて之に近いものを尋ぬるのが必要です、私は右五箇條に就て一々之を陳べませう。



○新年の歌、六首

おのがじゝ、千代のかげをや、寫すらん、年の始の、もちひかゞみに。　佐々木信綱

雪のうちに、はゝゑむ梅の、はつはなを、年の始の、さかえにぞみる。　原田嘉朝

新玉の、としたつ今日も、つげてなく、聲かはらぬ、朝がらすかな。　竹中茂成

立ちかはり、入りくる人の、聲のして、年のはじめは、賑はしきかな。　金子錠子

たてわたす、大路の旗手うちなびき、のどかに吹くか、としの初風。　石渡忍子

とり〴〵に、わが大君を、祝ふかな、ひなもみやこも、年立ちしより。　村田梅子

○樵歌入山

しばびとの、うたふを聞けば、山にても、たのしきふしは、ある世なりけり。　黒田清綱

○寒松　内山義熙

こがらしの、ふくをも知らで、立てるかな、みねにさびしき、松のひともと。

○閑居水聲　本居豊穎

やまみづの、しらべも月に、すむよかな、いざおきいで丶、ことはとらまし。

○松上雪　町原熈麿

しろたへに、みどりを添へて、すみの江の、雪とかつぎの、きしのひめまつ。

○くさ〲の歌

山家氷　竹屋雅子

終夜、枕にひゞく、谷川のおとたえにけり、氷そむらん。

朝時雨　西升子

村雀、ねぐら離れて、打羽ふく、羽音も寒くなる時雨哉。

岡霜　島田繁子

落葉ふく、風身にしみて、朝まだき、初霜白し、岡越の道。

夕

いつはとは、時は別ねど、夕暮は、人の戀しき、限也けり。

佐々木光子

木枯

木葉皆拂ひつくして、木枯の聲のみ空に殘りける哉。

金子錠子

殘雁

故郷を、別れ兼けん、雁金は、秋におくれて、鳴て來に鳧。

石渡忍子

原冬月

夕まくれ。鷹手に据て。越くれば、みか月寒し、み狩野の、原。

富田愛子

鷹狩

奥の、しのぶの鷹を、手にすゑて、片野の雪に、競ふ狩人。

岡野虎子

閑庭落葉

かくれがの、苔の錦も、埋れて、入日寂しく、紅葉ちる也。

村田梅子

月庭言志

そのかみに、變らぬ月の、影見ても、先悲きは、我身也鳧。

橘榮子

○冬山家

竹屋雅子

前栽の紅葉などりなく打ちり、うつろひ殘しま垣の菊も今は霜枯れ果、都の空だにいとさびしきを、まして山里はいかにすむらん。垣根ゆく筧のみづれこほりて、峰の木枯の音のみはげしからんなど推量らるれば、昔親しかりし人の、うき世をいとひてのがれたるがもとに、

日にそへて、うらかれまさる、山里は、花さく春や、こひしかるらん。

かくいひやりたれば、

人とはぬ、この谷かげは、なか〳〵に、風に知られぬ、紅葉をぞ見る。

とかへりしたるはまけじたましひなりや。

○秋之夜廼漫筆(六)

鈍廼風流士

詩人の鵯翼塚

秋の空なにとなく寂寞しく、山樹葉落ちて雲氣自ら沈々、風淅瀝として水の面を吹き人の肌を砭し、雁金の聲遠くして夕日も紅を散らし、朦朧たる暮烟の裡欸乃の音微にして、漁火消ゆる彎湖地の景色無情の色を現じ、萬飄零の有様は有爲轉變の幻像を示し、生けるは枯れ活けぬも凋みては

無端の憂愁を生じ、命運の變遷を嗟かしめ心志の蹉跎を恨ましむ。一度顧みて舊を憶へば萬事泡影の如し、いかに坎壈の身なりとも世と相合はぬ不幸、晏天に號泣すとも及ぶべからず。嗚呼この無味の生涯は死して有味となるや否や（鐵鞋將軍曰、是大疑問。）生きて無情の世途に吟嘯せんよりは死して天堂の歡を賦せむとすか（又曰、造語妙絕。）黃泉路上手を携へて逍遙するも世俗の劫塵を蒙るを願はずと、獨乙國の詩人クライスト子（貴族）は、最愛の佳人ヘンリッテ妃と相提唱して、湖水の畔に火筒もて果敢なくなりしぞ痛ましき。時に一千八百十一年秋の十一月にて、クライスト子は三十四の壯齡なりしなり。

鸞湖の畔（ポッダムの近傍）永く鸝翼の塚を存し、才子佳人の薄命をして千古に痛嘆せしむる塚石上悲哀の一曲は風雨と雖も蝕し得ず。（又曰、造語妙絕。）一小幽鬼旁に哭すらく、クライスト汝貴族の門に生れ端麗の容を以て天賦の才華を顯はし、或は筆を抛ちて干戈を事とし、或は劍を仗きて天下の山川を跋跡し、或は逆旅に敵兵に擒はれ（一千八百七征獨佛の役）永く入拉（ジュラ）山上のジュー城に鎖もて繫がれ、或は文章を著はして意を當世に得ず。憐む汝が徒に瑞西（スイツル）の農となら

むと欲して得ず。或はチヨツケ、ウイランド等の名家（詩人）と往來して詞章を磨き、シユロツフエンスタイン家之曲、ハイルブロン之ケトヘン孃、ヘルマン之戰、ホムブルク之王子（曲名）、破茶碗の曲、或數多の小說は萬丈の光焰を吐く才力の筆なれど、時人の好に適せず。憐む汝が快々の心、美人ヘンリツテ妃と山盟水約空しく惡因緣と結び、（又曰、爲謂之惡因緣。）律呂に深き阿嬌をして轗軻の身世を嘲たしめ、世上の囂々たるを脫して幽冥の鄕に雙棲するに到りしは、多情の後人をして涙潸々たらしむるものなりと。（又曰、沾濕豈啻多情人。）幽鬼の聲々啾然として塚畔に磅礴し、月色雲に隱れて湖頭の霜氣客衫を侵して已まず。噫。（又曰、再把景物結、悲絕哀絕。一噫字有萬鈞之力。）

鐵筆將軍評、嗚咽滿紙。筆泣墨哭。乃知生於情之文、不求巧而巧自至矣。苦頼士子靈而有知此文、亦當瞑于地下也。

○竹取翁物語講義第十一　琴條女史

かぐや姫のいふやう、於やののたまふことを、ひたぶるにいなみまうさむことの、いとほしさに、得がたき物を、ゆかしとは申つるを、かくあさましく

もてくることをなん、ねたく思ひはべる、といへど、猶翁はねやのうちしつらひなどす、

おやのゝたまうこと　前に翁の申さんと聞玉ひてんやといひてさて女ハ男に逢ふべき筈の者なればみ心あつき五人の人々の中一人にあひ奉り玉ひねといひたるをいふ○ひたぶるに　は一向にといふに同じ○いとほしさに　いかにも氣の毒にて堪へがたき樣なり○えがたきもの　えの字解に從りつ○ゆかしとはまうしつるを　諸本皆此の數字を脫して意聞えず今解の補へるに從りつ尙思ふに乞ひ侍りつるになどありたるにや○いとあさまじく　あさまじはすべて思の外なる意なりいと驚きたる樣をいふされど此處のあさまじくハおぞましくといふが如き意を含めり此は「持て來る」といふ動詞を形容したる語ながら其の意味は車持の御子が爲業に付きたるにはあらでかぐや姬が感情の上にかゝりたるなり○もてくる事となん云々此處も諸本脫字ありて「持てくる事をねたく思ひ翁は云々」とあり意通せず思ひを思ふに改めて解きたる說もあれど尙飽足らず解に補ひたるがいとよく聞ゆれば之に從りつ○ねたく思ひ侍るねたくはねたむといふ語を形容詞にしたるなりねたむは嫉の字妬の字の義なれども物語文などには多く口惜しといふ義に用ゐたりこゝのねたくも口惜しくの意なり○輝夜姬は元來男に逢ふべき身にあらねばいかばかり深き志のありとても始より男に逢はん下心にはあらざりしなりさるをゆかしき物見せ玉へらむに云々といへるは全く一時の方便にて親のいふ事をひた

ぶるにいなまんことの忍び難さに斯くはいひたるなりされぱいと得難き物をのみ望みつるに斯くおぞましく持てくるは誠に口惜しき限なりとなり○猶翁は云々姫のいふ事を聞入れず翁は閨の中を取繕ひ姫を御子に合はする支度をなし居たるなり

大意、其ノ時輝夜姫ノイフ様ニハ、實ハ親ノオッシヤル事ヲ一槩ニ斷ルノモ、誠ニ氣ノ毒デ堪ヘ難イ事ダカラ、ドウゾシテ男ニ合ハナイデ濟ム樣ナ方便(テダテ)ヲト種々(サマ〴〵)ニ工夫シテ、迚モ容易ニ取ッテ來ル事ノ出來ナイモノヲお望ミ申シタノデアルニ、意外ニモコンナニ譯モナク持ッテ來ラレタヿヲ誠ニクヤシク思ヒマス、トイッタケレドモ、翁ハ一向構ハズ、閨ノ中ノ支度ナドヲシテ居ッタ。

翁御子にまうすやう、いかなる所にか此の木はさぶらひけむ、あやしくうるはしく、めでたるものにも、とまうす、

此は亦翁が御子に向ひて問ふなり翁は玉の枝を眞の物と信じ其の美しさに感じて斯かる問を發(おこ)したるなり○あやしくうるはしくめでたきは其の美に感じたるあまり語を盡してほめそやすなり○めでたるものにも の下あるかなといふ語を含めるなり

大意、サテ又翁ガ御子ニ申ス樣、マア此ノ木ハドンナ所ニ御座リマシタカ、如何ニモドウモ誠ニ不思議ナ程立派ナ結構ナ物デ御座リマスト申シタ。

皇子こたへてのたまはく、さをとしの二月十日ごろに、難波より船に乗り

て、海中にいでゝ、ゆかむ方もしらずおぼえしかど、思ふ事ならでは、世の中にいきて何かせん、と思ひしかば、唯空しき風にまかせてありく、

此は御子が取敢ず口に任せて虚言を答へたるなり○さをとゝし　はさきをとゝしを省きたるにて一昨々年なり○二月十日　はきさらぎとをかと訓むべし○海中　うみなかと訓むべし○ゆかむかたも知らずおぼえしかど　いづかたへ行きて善きか方角も分らざりしがといふとなり○世の中にいきて何かせん　己が望を遂げでは世の中にいきてありたりとも生きがひなし何の為にかながらへんといふ意なり○空しき風　憑なき風といふ意なり

大意、皇子ガ答ヘテ仰セラレルニハ、一昨々年ノ二月十日頃ニ、難波カラ船ニ乗ツテ海ヘ出テ、行方モ何モ知レナイ、ドウシテ善イヤラ分ラナイ様ニ思ハレタガ、思フ事ヲ成就シナイデ、世ノ中ニ生キテ居タ所ガ為方ガナイト思ツタカラ、(ドウゾシテ望ヲ果サウト志ヲ立テヽ)唯憑ミナイ風ニ任セテ、アチラコチラトアルイタ。

命しなばいかゞはせん、いきてあらむ限は、斯くありきて、蓬萊といふらむ山にあふやと、浪にたゞよひこぎありきて、我國の中を離れて、ありきまはりしに、

命しなばいかゞはせん　死にたらんにはせん方なしとなり○蓬萊といふらむ山にあふや　此は疑の

語なれども此こにては想像の意を含めり○我國の中を離れて　は大洋へ乘出したる也

大意、死ンデ仕舞ヘバ如何トモ仕方ガナイ、生キテル中ハ斯樣ニ彷ヒアルイテ、蓬萊トイフ山ニ出逢フ事モアルダラウト、(精神ヲ皷舞シテ)浪ニ漂ヒアチラコチラト漕ギアルイテ、我國ノ中ヲ離レテ外ノ大海ヘ乘出シテアルキマハツテ居タ處ガ、

或時は、波あれつゝ、海の底にもいりぬべく、ある時は、風につけて、しらぬ國に吹寄せられて、鬼のやうなる物出來て、殺さむとしき、ある時には、こしかた行末もしらず、海にまぎれんとしき、ある時には、かてつきて、草の根を食物としき、

波あれつゝ　は聞えたる如し今もしかいふなり○海の底にもいりぬべく　船の動搖はげしき故海の底にも沈みぬべく覺えたりとなり○風につけて　風のまに〳〵といふに同じ○鬼のやうなるもの云々かゝる昔話のあるを取りて記したるなるべし○こしかた行末もしらず　困苦のあまり恐怖のあまり萬事を忘れたるなり○海にまぎれんとしき　まぎるゝとは行方も知らず漂ひて何處ともなく失せ果つるをいふ○かて　古は旅行に乾飯(此は今もあり)といふものを携へしを後世錢の通用出來てより旅にて食物を買ふ直をかりてとも省きてかてともいひ又食物を直にかてともいひたるなりこゝにてはたゞ食物といふ意に見るべし

大意、サテ斯ウシテアルキマハッテ居ル中ニハ、種々ナ憂キ目ニ出逢ツタコデ、波ガ暴レ船ガ搖イテ海ノ底ヘ沈ミサウニシタコモアッタ、風ノ爲ニ知ラナイ國ヘ吹キツケラレテ、其處カラ鬼ノ樣ナ者ガ出テ來テ、己ヲ食殺サウトシタコモアッタ、又アル時ニハ過去ツタコモ是カラ先ノコモスッカリ忘レテシマッテ、イヅコトモナク吹流サレテシマヒサウニナッタ、又アル時ニハ食物ガ無クナッテ草ノ根ヲ食物ニシタ。

ある時には、いはむ方なく、むくつけゝなるもの來て、くいかゝらむとしき、或時には、海の貝を取りて命をつぐ、旅の空にたすくべき人もなき所にいろ〳〵の病をして、ゆくへすらもおぼえず、

いはん方なくはいひ樣もなくなりむくつけさの甚しきをいふ○むくつけゝ　むくつけしとは氣味わろし恐ろしなどいふ意なり俗に毛がむく〳〵生ひてなどいふ形容語も同じ意の語也むくつけゝはむくつけしのしをげとして物の有樣をいふ語としたるなり、此の類雅言にも俗言にもいと多し○以下聞えたるが如し

大意、アル時ニハ喩ヘテイヒ樣モナイ恐ロシゲナモノガ來テ喰ヒ掛ラウトシタ、又アルトキニハ海ノ貝ヲ取ッテ命ヲ繫イデ居タ、旅ノ空デ助ケテクレル人モナイ所デ、樣々ノ病氣ヲ煩ッテ、無夜ニナル程苦ンデ行方サヘテ知ラナカッタ。

船の行くにまかせて、海にたゞよひて、五百日といふ辰の時ばかりに、海の中に遙に山見ゆ、船のうちをなむせめて見る、海の上に漂へる山いと大にてあり、其の山の樣高くうるはし、

船の行くにまかせて云々聞えたるが如し○五百日はいほかと訓む○船のうちを　のをはよりの意に見るべし○せめて見る　せめては強ひてまだ遙にてよくも見えぬをしひて見るなり○海の上に漂へる　著く所定ならず海に浮びて搖けるをいふ

大意、　斯ウシテ何方ヲ指シテ行クトイフ方向モ分ラヌ故、舟ノ行クニ任セテ、海ニ漂ヒテ五百日目ノ辰ノ時頃ニ、海ノ中ニ遙ニ山ガ見エタ、マダ遠クテ能ク見エヌガ、舟ノ中カラ無理ニ見ルト、海ノ上ヘ浮ンデル山ガ大層大キクッテ、其ノ山ノ樣ガ高クテ誠ニ立派デアッタ。

是や我が求むる山ならむ、と思へど、さすがに恐ろしく覺えて、山のめぐりとさしめぐらして、二三日ばかり見ありくに、天人の粧したる女、山の中より出來て、白がねの金碗をもて、水をくみありく、

さするにはしかすがにといふ語の約りたるなりさりながらといふが如き意なれどもすこし輕し是が我が求むる山ならむとは思ふものゝしかすがに恐ろしくて遽にはえ登らざりきとなり○さしめぐらして　は山の周圍を棹さしめぐりての意にてらしはりの伸びたるなり人してさしめぐらせてと見る

は非なり○白がねの金碗しろかねは銀なり古語にすべて椀をばまりといひ其の金属もて製りたるをかなまりといふなり此は銀して製りたればしろがねのかなまりといふなり

大意、　是が自分の求める蓬萊山ダラウトハ思ツタケレドモ、流石ニ恐ロシイ様ナ氣デ、直ニハ登レナカツタカラ、山ノ周圍ヲ廻リナガラ、二三日見テアルクト、天人ノ様ナ姿ヲシタ女ガ其ノ山ノ中カラ出テ來テ、銀ノ椀ヲ持ツテ水ヲ汲ンデアルイタ。

是を見て、船より下りて、此の山の名を何とか申す、ととふに、女答へていはく是は、蓬萊の山なりと答ふ、是を聞きて嬉しきこと限なし、此の女に斯くのたまふは誰ぞと問ふ、我が名ははうかむるりといひて、ふと山の中に入りぬ、

船より下りて山に下りたりけり船より山は高けれど陸に下り立ち船に上りなど古より斯くいふ習なり然いふ理なきにもあらず○蓬萊の山なりと答ふ　答ふとあるは如何上に答へていはくとあれば山なりといふことなくては叶はぬにやと思はる○はうかむるり皇子が僞り作りたる此の仙女の名なり○ふと俗にフイトといふに同じ隱るゝ如く速に山の中に入りたるなり

大意、　是ヲ見テ己ガ船カラ下リテ、此ノ山ノ名ヲ何ト申シマスカト問フタレバ、其ノ女ガ答ヘテイフニハ、是ハ蓬萊ノ山ダトイツタ、是ヲ聞イテ嬉シイコト際限ナカツタ、此ノ女ニ斯ク仰ルハ何トイフ方デスカト問フタレバ、私ノ名ハはうかむるりトイフノダトイツテ、フイト山ノ中ヘ這入ツテシマ

ッタ。



○美人車

飯臺思案外史作

其四──心まで乘り合ッた馬車の内。

今しも九段の坂を下り來る男女の二人連。男といふのは年の頃廿四五、男でさへ見とれる程の好男子、鬚の鹽梅抔もこわらしくなく至極上品な男振。夫に着物もなか〳〵サッパリして──くどい樣ですが──憎らしい程いゝ男です。連れの婦人これもなか〳〵の美形で、年の頃はさうです二十三四でせうか。丸髷を品よく結ッて銘仙の綿入に黑繻子に八反の腹合せの帯を〆め、夫に黑チリの羽織──勿論小サい縫紋あり──を着て所謂イキといふ點は少ない替り、裝粉が何處までもシットリとして至





極音無造は大に此婦人の品位を高めます。誠に才子佳人の好對アナ羨ましの極です。後方から見ると兩人の羽織が一枚に見へる程接近して、少し歩行いては立止り、止まッてハ又歩行きだす樣に、さも睦しげに談しながら行きます。

「チョイト貴郎、モウ餘ッ程おそくなりはいたしませんか。今日歸途にッンナに廻にもなりませんとおッしやいましたからこちらに來ましたが大變に立派な勸工場でございまするネ、

見れば一六先生の書いた九段勸業場といふ大きな額が正面に覗いて居て門搆家造も立派。先づ東京中——日本中で一番立派な勸工場です。

「さうサ、おまいの云ふ通りまづ東京一だらうネ、

「サア這入ッて見ませう、

女は嬉れしさうに其男の跡を尾いて行く心の中、嬉れしさに思はず足も所謂——地に附かぬ程

勸工場を立出る以前の若夫婦

「どうせこんなに、遲くなッて、今から歸ッて臺所を騷すのも氣の毒だから、堀江でも誘ッて萬代軒へでも行ッて見やう、

「ヘエ　それがよろしうございませう、お竹さんにも暫く遇ひませんから（察して見るのに此お竹さんは堀江とか云へる人の妻か娘で、まだ此婦人が駒形の妻君にならぬ以前同じ學校の朋友てあらう）

「ム、　それならオムニバスに乘ッて萬世まで行かう

「ハイ

廣くもあらぬ乘合馬車の內。白髮の老爺が脇の下を十六十七の娘の振袖がくゝッて居れは、小僧が持ッて來た荷物が旦那の膝の上に乘ッて居ます。彼の若夫婦の前に腰を掛けた老女、

「おりやうや　大層今日は歩行いた故か餘ッ程草臥れた樣だよ、

「さうでございませう　今日は餘程歩行きましたから、又家へ歸ッてから、腰が痛いなんておッしやッてはいけませんよ、オホヽヽヽヽ

「腰が痛んだら又おまいに揉んでもらうばかりサ

老人の癖とて、馬車の内も、己が家の内も同じ樣に思ッて居ます。

「それはさうと早く歸らないと、叔父さんが獨りで嘸待ちどうしがッて居らッしやるだらうネ、おりやう、

おりやう〳〵と此老女が呼ふ度に、以前の紳士が首を傾けて何か思ひ當る事でもある樣に老女と其娘――今老女に話しかけられて居るおりやうとやら云ふ娘の顏とを交る〳〵眺めて居ました。彼の娘もあまりに自分の顏を見詰められますから、こちらからも其紳士の顏を見ると、アラ！紛れもない駒形芳文。シカモ二三日前に其門までわざ〳〵尋ねて行ッた程戀ひ焦れて居る駒形芳文。乙女が胸は今更に波立ます。見れば見る程からやッて差向ひで見れば見る程どうも……似て居る。又しても乙女が妄想。紳士の方でもさうです、おりやうと云ふ名前も同じだし、夫に年頭も恰度合ッて居るし、モウ此位の年頭になる時分、夫に何處となく幼立に見覺のある顏附。イッツ聞ひて見やうか、『おまいが許嫁のおりやうかい』それもあんまりぶしつけ。夫に今はレッキとした此お愛といふ――今もチキ脇に腰を掛けて居るお愛といふ妻がある。どうしたらよ

からう。マア聞ひて見やうか。

乙女の方は夫れ處か、飛び立つ程『貴郎が妾の……』。どうして聞かれう？　見れは傍に立派な妻君。丸髷に結ッた美しい奥様が居る。どうして身装から緻縹まで、コンナむさい妾が其足元にも及ばない、ア丶もうあきらめやう／＼所詮ダメだ。思へば首筋も自然垂れて行きます。さうともしらぬ老女、

「おりやうや／＼萬世から家までは夫れ程遠くもないから、歩行いて行くとしやうチ、

道程の詮議立。おりやうが心では『おいて頂戴ッ』なか／＼それ處ではない返事も何時になく不愉快に澁ッて居ます。

「エ丶どうでもよろしい様に……貴郎の……

さりとは夢中な乙女心！

「チ貴郎お竹さんの處へ參りますのには矢ッ張萬世で下りた方がよろしうございますの？

「サウサ。

氣のない返事。何時に違ッた夫の不機嫌。
「お竹さんの處へは何か土産でも持ッて參りませうか、
「サウサ。
矢張氣のない返事。何か妾の申した事でもお氣に障ッたのやら？　ハテ？　知らぬお愛の心では是も無理でない。紳士は深く息を吐き、
「アヽどうも…………
「貴郎どッか…………どうか…………
馬車は止る。下り立つ群集の客おもひ〳〵に別れ行く、別れかねるは娘が胸紳士が心
（嗣出）



○政治小說　條約改正（小本一册二百四頁定價金五十錢　東京麹町區麹町五丁目文海堂發行）　鐵筆將軍

此の編主公を立てず、善惡を設けず、囂ましき是非の理屈と、六かしき憲法の講釋とは此れを反古籠の中に收めて、敢て筆頭に上らしめず。唯だ詮とする所は當今社會に出現する物象の反影を寫すにあり。されば其の趣向の如きも斬新なり、奇峭なり。或は九重の雲に花を探る紅芬隱れて模糊たるもあり、又は千頃の波に月を弄ふ金影碎けて散漫たるもあり。讀者これを以て評者に問へば、評者は之に答へて曰はん、行文の妙なるは著者澁柹園主人靈筆の致す所、脚色の尨雜にして却て面白きは、君其れ之を社會に問へと。鐵筆將軍眞面目に評す。

○新著百種第六號「殘菊」　鐵筆將軍

新著百種の第六號として出でたる柳浪子の殘菊に就き、余は拜讀早々く例の盲評を草したりしが、少しく行違の事ありて其の草稿を失ひたり。今又著者の需めと讀者の望みに止むを得ず、數分間の暇をぬすみて、かきしものは左の通り。

本書の趣向は、肺病を以て始まり又殆んど肺病を以て終る。之を目するに決して悲哀小說といふべからず、余は無理にこじつけて凄い小說といふ、讀み去り讀み來る間、淚出でずして總身ゾツ〱するを覺ゆればなり。　それはとまれ、可愛の主人公と蹴仆し、踏みにじり、或は突き、或は切り(皆形容語)而して無殘にもうち殺さんとして、否殆んど打ちころして、而して最後の僅々たる四十字もて、忽ち之を萬死の中より拯ひあげたる其の趣向敢て新らしきものにもあらざれども、先づ妙といふて不可なし。　されども自敍體を以て之をかゝれしは、如何にも大不覺なり。　何となれば其の可愛の主人公が「私が」「私が」とかきつゝあることなれば、如何に蹴らるゝも如何に踏まるゝも如何に切らるゝも、突かるゝも、決して殺されざるなるべし、決して死せざるなるべしとは讀者の推し得る所なればなり。總じて充分なる筆と揮ッて現はし出だせる、慘澹たる景物も、決してろの木枯の冬に終らで、必ず花咲く春に遇はんは、讀者の察し得る所なればなり。　著者は小說の面白さは讀み行く先のわからぬ隱約の間にあることを忘られたるにや。　かへす〲も遺憾なることにぞある。

文體につきては非難する人もあれども、余は大に其の輕妙なるを賞づるなり。具眼者にも解らず、無眼者には勿論解らず、唯其の具眼者と無眼者との間にある人種の人にのみ解る文體に比すれば、其の優る事果して幾等ぞや。文體已に善し、然れども修辭の不穩當とおぼしきもの所々に散在するは惜むべきの限りなり。二十四丁第二行「幸ひ母の兄が東京に官員をして居るで」三十二丁第二行「西陣に廻つて織物の帶を買つて貰つて」などの如し。それに乳母を呼ぶに直に「うば」とかゝれしが矢張ばアーや」の方よろしからずや。

余が本書に就き見る所粗斯くの如し。余も元來肺病患者にして如何にも心細き身体、殊に十一月三日より十八日まで、毎日時を極めての咯血其の病間に拜讀したることなれば、感情を動かすこといと深かりき。敬愛なる細君傍にありて「其の本はまァれ止しわろばせ、れ身体にさはりますから」と注意しくれたるも理なり。兎に角著者の靈筆れそろしく〳〵。

社員　琶湖漁史執筆。

○筆華第一號

筆華何れの處より來る、筆華記者曰く、文園社の發行し來りたる文園が塵世を脫して、去ッて白雲冷かなる處に赴けるに方り、一枚の筆と其の社に殘し去りたるより、春となく夏となく秋去り冬來るも、常に其の毫端に花を開くよりするなりと。　吾人は丁寧に之を一讀し其の幾多の青年諸子が各々其の胸裏に蘊蓄する處の精英を、縱橫自在たる筆端に發し、明治文壇の錦上に花を添へたるを見る。若し夫れ靑年諸子は後來に於いて大に開くを期すべき蕾なり、而して大早計にも時の未だ至らざるに斯く開かしむる或は室の花の如くにして了らんかを恐る。　などいふものあれども是れ所謂杞憂者の言なるべし

次號には紅葉山人著「初時雨」の細評を掲ぐべし



妻妾の稱呼　承前

鶯陵迂人　山下重民　稿

きさき

皇后をいふ。後世は音讀を以て通稱す。

東雅云、古語にサキといひ、サイといひしは幸也。上にキといふ詞を加て、キサキと稱申せしハ、君の寵幸し給ふの義にやあるらん。新撰字鏡に

和訓乑云。きさき、皇后を申奉る。君幸の義也と云り。妃をよめり。妃也と注せり。古へ神たちを尊みて天皇に准らへ、皇神と申せる類にて、其妻を后と稱す。出雲風土記に、阿遲須枳高日子命之后天御梶日女命の類也。職官志云、帝妻之謂后。夫爲后者、所以齊尊體資聖治、助天地宗廟之祭、禮無二妻、故不兩立、必擇於其坤德柔順寵幸所在

而後冊立、乃其所居是謂中宮。注に云、爲后者必君之寵幸存焉、故曰貴佐貴謂君爲貴美、省美也、謂寵幸爲佐貴也、佐貴佐伊音通、故謂中宮曰貴佐伊美野。

右三說同義此にて。き。さ。き。と稱するの意は明瞭なり。漢土に后といふの義は、曲禮天子有后の疏に、后後也、言其後於天子亦以廣後胤也とあるにて知るべし。白虎通に商以前皆曰妃、周始立后、正嫡曰王后秦漢曰皇后と見えたれば、皇后の稱は秦漢の時より起りしものならむ、又皇后を女君といふこと、魏妻郭后表に出たり

み。め。

妃をいふ。皇太子親王の正配なり。今音讀を以て通稱す。

東雅云。日本紀には妃字讀てミメといひ云々。注にミメとは御妻の義とあり。說文に匹也、爾雅に對也后妃也と見ゆ。左傳に妃音配とも出たれば、配偶の義なるや知るべし。總要に女與己身儔、古嬪御之貴次于后者曰妃とあれば漢土も亞后の稱に用ゐしなり。然れども上古は少典妃黄帝妃帝嚳元妃といひ、初學記に古者天子后宮嫡庶皆曰妃と

われは、只尊貴配匹の概稱に用ゐしのみ。

みやすどころ　親王の正配をいふ。

和訓栞云。みやすどころ、御息所と書り。みやすん所とも見えたり天子の休息所の義。宮人の皇子をうみ給ふの稱なり。また東宮の妃をいへりとあれど方今稱する所に據て單に親王の正配とせり。

おとど

夫人といふ。今は音讀を以て通稱す。貴人の妻の泛稱なり。

東雅云。敏達記に始て夫人を定められし事見へて、夫人の字讀てオトヂともオホトヂともいふど。釋日本紀に注せしは、其世の人夫人の御事を稱して大刀自と申せしか故なり。（藤原夫人を大刀自と申せし事ハ万葉集にも見ゆ。）

曲禮に諸侯曰二夫人一（釋名同し。）又天子有レ后有二夫人一と見ゆ。逸史釋言に按周室之制、王后而下曰二夫人一、曰レ嬪曰二世婦一曰レ妻、諸侯取二於夫人一、大夫取二於世婦一、士取二於妻一、以爲二正配之稱一、等威秩然、我邦上世皇后之下、有二妃夫人一有レ嬪云々。稱呼私辨に敬所の說と引て云、漢土之俗稱二官人之妻一曰二夫人一、

官人之子曰二公子一、猶三我邦人言二奥方若殿一也、尊稱也、非二正名一也云々。　按夫人元女官之正名也、於レ義甚重不レ可二妄稱一。

重民按するに夫人の稱は職員令に夫人三員（五位以上）とあれは、官名といふ說は當れりと雖も、後世の歴史には大名に用ゐたること多し。今は勅任以下奏任以上若しくは華族等に用ゐ。　而して招待狀には令夫人と書するを例とせり。

れくさま

奥様と書す。　俗間士族若くは官吏の妻の尊稱とす。　昔時は大名の妻を奥方と稱し。　其夫は單に奥とのみ稱せしと云。　奥は堂奥の奥にて、深室をいふ妻は深室に居る者なるを以て、かくは稱するならむ。

俗に妻をやまのかみといひ、罵る時に用うれどもこれハ罵る辭にあらず

其故はおくといふことにて、即ちれくは伊呂波のやまの上にあればなりと云ふ。（伊呂波へおくやまけさ接續するなり）

ごじひぞう

俗間妻の尊稱士族平民にかけて用う。多くは御新造と書し或は略してごじひぞといふ。

貞丈雜記云、人の妻を御新造といふこと、婚禮の前に其妻の居所を新しく造る故、あたらしくつくると書て、しんぞうといふ也。或說に、新しく造りたる舟を新艘と云ふに准すといふは非なり新造と稱すること昔もあり。蜷川殿中日記にあり。

橘庵漫筆云、士の妻女稱して御新造といへり。いかにも此字義あたらず。御深窓と云べきを誤りつたふるものか。御深窓は奥樣と云に對して稱するなるべし。李白の詩に美人捲珠簾、深坐嚬蛾眉と作り、長根歌に楊家の深窓に養れといえり。何れにも御深窓と書が禮なるべし。秋齋間話の新艘の說野にして陋哉。陸氏か傾城の新艘の說ハ可なるべし

右二說同じからず。此等の稱語は俗語なるを以て、何れを善しとすべきやを知らされども、新造の說取るべきに似たり。深窓は娘に

適し妻には適せず。其引ける詩も當らず。後の娼妓の新艘の說は我が娼妓名稱考に詳記す。

にようばう

女房と書す。俗間妻の泛稱。

和漢三才圖會云、按室平日所レ居也、呼二他人ノ妻曰二內室一、未レ嫁女曰二室女一、夫既死婦勤二家業一者曰二古室一、俗呼二已妻一曰二女房一。（房亦近二室家一故爾）

貞丈雜記云、古は女の事をすべて女房といふ。房はねやとよむ字にて部屋と云に同じ。部屋を持たる位の女を女房衆といふなり。部屋を持ざる女をも女房といふはうやまふ心なり。今は人の妻の事をのみ女房といふなり。

按するに。女房は昔時宮女の稱なり。女房聞書內裏女房之次第等の書にて知るべし。之を妻の稱呼とせしは後世の事ならむ。

（未完）

○エドウイン、アーノルド氏の日本に對する贊評

(前略)余は僅かに四週間日本に滯在せる經驗を以て、嗚呼がましくも日本人幷に久しく日本に滯在せる人々の前に於て日本に關する觀察を談話するは赤面の至りに堪へず。然れども日本は余を驚かしめ、余を歡ばしめ、余を心醉せしめ、且つ全く余を滿足せしむると云ふの感情は實に禁ずる能はざる者あるなり。余は未だ曾て斯く程まで其住民及び滯留人を羨むべき良國を尋ねしことなし。固より何れの國にても表裏両面のあるものなれば、此の國に於ても亦彼の晴やかなる、活潑なる、且つ面白き生活の外には、又他の裏面もあるべし、彼の三伏の暑氣、地震、及び倫敦の中心たるペンメル街より非常の距離ある等の不便を外にするも、彼の條約改正に關する逆上の夢、行政上の困難、政治上の騷擾、外交上の競爭及び不滿等に附き、往々余が耳朶に觸るゝものなきにしもあらず。然りと雖も、設ひ日本は全く極樂淨土に非ずと云ふとも余が曾て見たる國々の中にては最も蓮華地に接近せる國なりと云はざる可からざるなり。或は寺院の蓮池の傍に彷徨し、或は話にある如き美麗の花園、若くは鎌倉、又は日光の美麗なる景色の中に逍遙し、或は夢幻の中に在る如き神社の前なる松柏の間道に遊歩し、或は茶屋の潔白なる疊の上に坐し、或は眠れる如き湖水に浮び、或は動きなき大山の下に在りては、余は實に歐州生活の俗塵を脫して遙かに仙境にあるの思を爲せり。故に余は獨り屢々「チヂツセイ」希臘詩伯ホーマーの詩中なる希臘の詩句中より左の句を吟誦せり、之を英語に譯すれば左の如し(之を又日本語に意譯す)。

凡そ誰にても、一たび蓮の軸なる蜜の如く甘き露を味ふ時は、再び其土を去ることを思はず、又再び家に歸ることを求めず、何時までも此土に止まり、蓮を食ふものと共に滿足すべし、蓮を拔き、蓮を食ひ、而して其歸るを忘れなん。

(中略)然りと雖も、余が日本に來りて觀察する所に依り、彼の驚くべき富岳よりも尚驚くべく、彼の愛すべき縫箔せる絹布よりも尚愛すべく、貴重なる象牙刻細工より尚貴重なる、精妙なる七寶よりも尚精妙

なる者を見るを得るものは他なし、日本人風俗の上品なると日本人生活の單純なる快樂其人を樂ましめ又自ら樂ましめらるゝを一般に好むと及び其性質の殆ど神聖に近き甘味あると等にして、余は淡泊に信ず此點に於ては實に日本を他の諸國の上に位せしむべきことを斯く言はゞ、人或は過大の言を以て余を難ずべし。此の國に(婦女子余の眼には半ば天人の如く見ゆれども)、は未だ其適當なる權利を得る能はず、封建の法は源く其根を下ろして未だ全く之を除くとを得ず、然るに斯く此國を賛美しては余を難ずるものあるも亦止むを得ず。然りと雖も、余或は不適當の觀察家たるや否やは自ら之を知らずと雖も、凡そ此國人民の凡ての階級に於て、均しく其言語動作の特別の愛嬌を發見するなり。そは他なし人々互に相尊敬し、謙にして卑劣ならず、其歸する所は全く好意に外ならず。凡そ斯る事柄は人間生活に純粹なる空氣を與へ、自ら他の自然に磨かれざる國民の禮讓を以て之に比すれば尙鄙野なるを免れざらしむべし。諸君希くは此國民の良性質を保存せられよ此良性質は諸君が曾て外國より輸入せるものに非ず、又之を外國に輸出せらるべきものに非ざるなり。曾てエリザベス時代に、英國水夫にウイルアダムスと云へるものありき、此者は英人中始めて日本を見しものにして(其墳墓尙此土に在り)、日本のことを記して云へらく此國は大なる謙讓を以て支配せられたりと、余は今日に於ても尙然るを見るなり

さて右に陳べたる如く、日本社會交際の優美なるとは何に因りて之を得たるか、余は之を三個の原因に歸せんと欲するなり。第一に日本の天然と歷史と相混じて組成したる日本人の血統、第二千三百年間の泰平、第三佛敎の溫和慈仁の勢力の三者に外ならざるべし。

余は斷じて云はんとす、凡そ如何なる國にても一たび佛敎の敎化を受たる國々には多少の練磨を受けざるはなく、多少其社會を高尙ならしめざるはなく、一たび此敎の入れる國には、其人民の性質の上に深切慈悲の磨滅す可からざる痕跡を留ざるものなし。又此宗敎の一たび其國に入る時は、又た決して見捨て去ることあるなく、設ひ現今印度人民は概ねブラミン敎を奉じ佛敎信徒は僅々の數に過ぎずと雖も、其

ブラミン教も亦到底佛教の外形を變じたる者に過ぎざるのみ云々。

余は教育と新聞とに就きては聊か經驗あれば、此二個の問題に就きて一言するは寧ろ無難なるべし。時としては余獨り望むらく、我々外人は何人も未だ日本を發見せざらんことを或は余獨り彼の浦島子の如く、龍宮神女と共に扁舟に掉して此國に來り、再び歸りて此國の幸福なると美麗なるとを世に告げざらんことを。然りと雖も此望みに反して、我々歐洲人は既に此國に來り、又日本は既に種々のものを外國に求めたり。諸君は既に醫術上の改良軍服とを獨逸から採り、經濟上の進歩は之を白耳義に求め、民法は之を佛蘭西に受け、麵粉と石油とは之を亞米利加に購ひ、工藝と海軍とは之と英國に形どれり。余は諸君が僅かに此混合藥を利用して以て其益を受くるならんと信ず。然れども余が諸君に向て希ふ所は、諸君が日本流に之を保存せんことを。若し諸君にして日本の日本たる所以を忘れ、若し新事物を愛するに其度に過ぎ、日本自然の進歩を强誘し、或は新時代の壯年者を、老年社會の生活と愛敬との域より急激に隔離せしめ、或は設ひ學術の大なる手にても、餘り手荒く、彼の日本社會をして幸福ならしむべき、老と敬し幼と勞はる良風に觸れしめ、或は又た我々が煩雜なる半球より輸入する書籍と思想とを以て、之を好み之を受くる階級と、之を受くる能はず又好まざる階級との間に中墻を据えしむる等の如きことありては、我々が折角西洋より諸君に送る所のものは、何物と雖も其得を以て其損失を償ふ能はざるべしと信ずるなり。云々。

右はアーノルド氏の演説の大要なり吾人は次號に於いて之を評せん。

○日本昔時の婦人

大日本教育會にて、重野文學博士が演説せられたる「本邦古來教育の大概」といふもの、載せて同教育會雜誌第九十二號にあり。其の中婦人に關する一節は、實に今の女生徒などをして猛省せしむるに足

るものあれば爰に之を掲ぐ。

女子の敎育の從來の有樣ハ、先刻もベルツ氏の演說があり、また此會に於て昨年であつたが、エブラルと云ふ人が演說をされた女子敎育の論を、私が昨年旅行をして歸つてから雜誌で見ましたが、至つて面白い議論でありました。　先刻の演說も大體は同じことと聞ゐます、日本の女子は是れまで敎育がない、或はあつても今の女子の敎育か優つて居ると云ふのは、大きに間違て居るとエブラル氏がいはれ、中中日本の女子は是れまで敎育の屆いたものであつたと云ふでありますが、是れは他國の人が申されたのであるから、少しは御愛想があるかも知れませんが、日本の女子は、從來敎育が全くなく、或は不完全であつたと云ふことは言へぬと思ひます、中中昔しからの女子の敎育は、能く行屆いて居る。　尤も今流行する學科と悉くやつて居ると云ふのではありません、但し其學科はベルツ氏の言ハれた通り、無用の學科ある、又エブラル氏も無用の學科は研究するに及ばぬと言つてあります。　私などは其有用無用の判斷ハ知りませんが、右の兩氏が云はれるから、さう思ひますが、之を無用とすれば、有用の敎育は日本の女子はよほど進んだもので有ります。　尤も女子の當時の學科を深く修めて、碩學になつて居る人も往往あります、御承知の通り、紫式部とか、淸少言納とか、和泉式部とか、赤染衛門などは男子も及ばぬ程である。　從來の女子の敎育は、行儀作法を始めとし、縫針裁焚の仕事、夫に仕へ舅姑に奉事し、子孫を育て、家を保ち、親族緣者の交りと云ふ樣な事は幼少より大抵敎育が屆いて居ります。
これは上下尊卑貧富を分たず、皆一樣であります間にハさうしない人もあらうが、先つ凡そはさうなつて居ります。　女子の敎育は、日本では外に顯はれぬ樣にするのをかんじんな事と致します、其れが女子の道になつて居ります。　紫式部は、あれ丈けの學者でありますが、數字の一の字も知らぬと云つて、召仕の下女にまで隱して居つたと云ふことが、式部の日記に書いてあります。　昔は女が物を知つて居るのを鼻先に顯はすを、至極卑める風俗で、近來までも其氣風でありました、それて學問などをしても世

問術ふなどと云ふことは有りませんから。　日本の女子は是迄は無學文盲であつたと今の人が思つて、今の婦人になつてから始めて學問がある樣に云いますが、決してさうでない、私は諸國を巡廻して古文書を尋ね捜しましたが、所に依つては女子の書いたものを澤山見受けました。　昔しは婦人でも戸主と爲ることが出來て、（コレハ明治ノ御定ノ通リ）夫無くなり、子が居らぬ人などは、估劵だの、或は賣渡證文、または讓狀などを書き藤原氏の女とか平氏の女とか書いて、書判などを添へたのを往往見當りますが、手跡と云ひ、文言と云ひ、中中立派なもので、同時の男子の書いたものと較べて見ると、決して負けることはありません。　また今の女子の學科を修めたのと比較して見ても、優りはしても劣りはせぬかと思はれます、それで昔しの女は無學文盲であつたと云つて、さげすむことは出來ますまい。　又其證據を取つて、言へば歌などは第一證據になりませう。　百人一首に女の歌が三分の一載つて居ります。　萬葉集にも澤山ある。　勿論みな名歌であります、歌は學問がなく智慧がなくつて立派に出來るものではありません。　其詠歌の良い所で見て、日本の女子は昔しから學問もあり、物も知つて居り、道理も分つて居たと判定して宜からうと思ひます。　龜山天皇の時分に、宮中の女共に物事を問はれて、答への能く出來る男は少ないものであると云ふことで、當時左大臣實雄公が宮中に於て、女に何か問ひ懸けられはすまいかと思つて、ピクピクし居たと云ふことが徒然草にありますが、京都の女子は、公卿方までも困る樣な學問をしたものと見える。　又幕府の時の三百諸侯即ち今の華族方の御姫樣などには、隨分怜悧な方が多い樣だ、男の方にも立派な御方もあるけれども、俗に云ふ華族然たる所もあるが、其割には女中方は中中立派な人が多い、其譯は婦人は他に緣付く者で、素より其家で終るべきものでないから、小さい時から教訓が屆いて居る。

男子は之に反して、大名なれば自分の内で終るから、偶偶不出來な御嫡子などが生れる樣であります。

今ペルッ氏の云はれた通り、踊りするとか歌を謳ふとか云ふことなども、決して徒らのことではありませ

ん。常盤津を謳つても、清元を謳つても、音聲を發するは惡いことではない、踊は第一立居振る舞ひの爲めになり、又身體を動すから運動にもなつて宜しい、さう云ふことを小さい時から敎ゆるは、是迄普通の事になつて居る、算術も掛算などは大抵の女は稽古して居る。さうして一家を治め、子を養ひ育てる等、前に擧げたる箇條が出來れば、其れで婦人の職掌を盡くしたものでありませう、エブラル氏の說にも、夫は天子、妻は總理大臣、子は人民ぢや、その總理大臣たる仕事さへ出來れば、頂上なものだ、女の職掌はそこに限ると云れますが、其所は日本の女子は是れまで先づ出來る樣に成つて居ると私は思ひます。此女子敎育の事は。既にベルツ君の說に盡してあり、又エブラル氏の說もありますから、別段精しく申しませんが、男女揃はなければ、古來敎育の大槪と云ふ趣意に叶ひませんから、ざつと申して置きます。

○末廣重恭著「鴻雪錄」の發賣を禁ずべし

鐵膓末廣重恭氏が巴里滯在中、日々目擊せし所の者、細大殘さず之を記載し、積んで一卷を成せるもの、此の鴻雪錄となす。是は夙に出版發賣になりたるものなれども、吾人は氏が著なるを以て、格別の事はあらじと信じ、敢て之を購讀するの勇氣なかりき。而して頃日友人より其一本を贈られたるを以て、止むを得ず之を机上に上せ、一讀過せんとしたり、讀んで八十二頁に至り、覺えず卷を拋ち絕叫したり、

本書の發賣は禁止すべしと

八十二頁に如何なる事ある、奇怪極れる二葉の插畫あり、吾人は之を見て風俗を壞亂するに充分なるものと認む。而して理非の何たる、善惡の何たるを辨ぜず、唯營々利にこれ狂奔する小人輩が、怪しかる書を發行し、怪しかる畫を發賣するは、疾むべきの至りなれども、又少しく恕せざるべからざる

ものあり。　而して彼の有名なる末廣氏が、重恭君が、鐵腸先生が、之を爲さんとは、咄！　何等の怪事ぞや。　流石の末廣氏なれば勿論是等の怪畫の眞の怪畫なるを知らるゝならん、不作法極まれるを知らるゝならん、風俗を紊亂するを知らるゝならん、然り、氏は充分之を知悉せらるゝなり。　自ら記して曰く、

十一日陰雨近街を散歩し、寫眞數十枚を買ふ、内に婦人の衣を脱して花下に立つ寫眞あり、就て西洋の繪畫等に關し少しく理屈を述べん。　余は米國新育府(ニユヨーク)にて妙な蠟細工や油畫を看て小言を述べ、朝野新聞に通信せしことあり。　其後英國に赴きナシヨナルカアリー又はサウスケレシントン等に遊んで、古今の名畫及び刻像を視るに、裸体のまゝなる男女の形を公衆の前に掲げざるへなし。最初は奇異の思ひを爲せしが、遂には目に慣れ少しも怪しまざるに至れり。殊にサウスケンシントン等にある古き銅像に至つてハ、往々男子の膀間に巨大の陽物あり、英京の貴女達は己れの傍に於いて、脚とか腰とか云ふ詞を吐くものあれば、失禮なりとて色を變じ、席を起て行く程なるが、此に來れば多人數の前に於て、目を細くし涎を流して之を見るは、隨分平仄の合はぬ話なり。　思ふに裸体の圖畫彫刻ハ西洋より傳り來りしに因り、美術の妙處とか何とか名を付けて之を賞玩すれども、若し之が西洋になく獨り日本か支那に行ハれしむれば、西洋人ハ必らず散々小言を述べ、失禮なり野蠻の遺風なり、公衆に示すべからざる者なりと云ひ、ソコデ洋人の説と聞けば神明の託宣の樣に思ふ我國人は、忽ち之に雷同して急に此等の圖畫刻像を禁止するに相違なし。　余は倫敦(ロンドン)を發する三四月前、尾崎學堂氏等と有名なる水晶宮に遊びしが、室内の婦人に衣を脱して馬に倚る像あり、是れは世間に名高きものゝ由にて、同處の寫眞を賣る所にても、許多大小の紙に寫して之を店先きに掲げり。　余は學堂氏に語ッて曰く、我邦の警視廳などにては頻りに畫圖等の事と八ヶ間敷云ひ、少しく人の情思を發動する樣の姿のあるものは、之に淫猥の名を付け、繪入新聞等に掲載す

ることを差止めらるゝと聞く。此の寫眞の如きは其の頭を丸髷にし、出處を記せずして之を紙上に掲げしならば、忽ち大眼目を頂戴するに相違なからんと。因ッて話の種と思ひ一枚買ひ置きたれば、今日買入れし婦人の寫眞と同一に之を左に掲載すべし。云々。

嗚呼氏は斯く記しながら何故に之を掲げしぞ。所謂火を以て火を救ひ、水を以て水を救ふものなるべし。氏も固より發賣を禁止せらるゝと覺悟の上なるべければ、如何ありても鴻雪錄の發賣は禁止せざるべからず。

○餘興

(1)二重の眼で、二重の鏡に向へねば、出來ぬ事があります。何でせうか。

（右丹後河田力藏氏出題）

(2)四人は十字の上に坐し、一人は一字の上に坐す、これは何？

（右土佐山崎雉子氏出題）

(3)山中に古祠あり、既に朽敗して其の何の祉たるを知るべからず。種々祠中を捜索して一の古木綿の片に書せるものあるを見る。曰く、

日あり三人に踏まる、又日あり孤立して一人の上に在り、日月同居して中を示すと知らず是れ何の古祠なるや。

（右伊豆獨線山人出題）

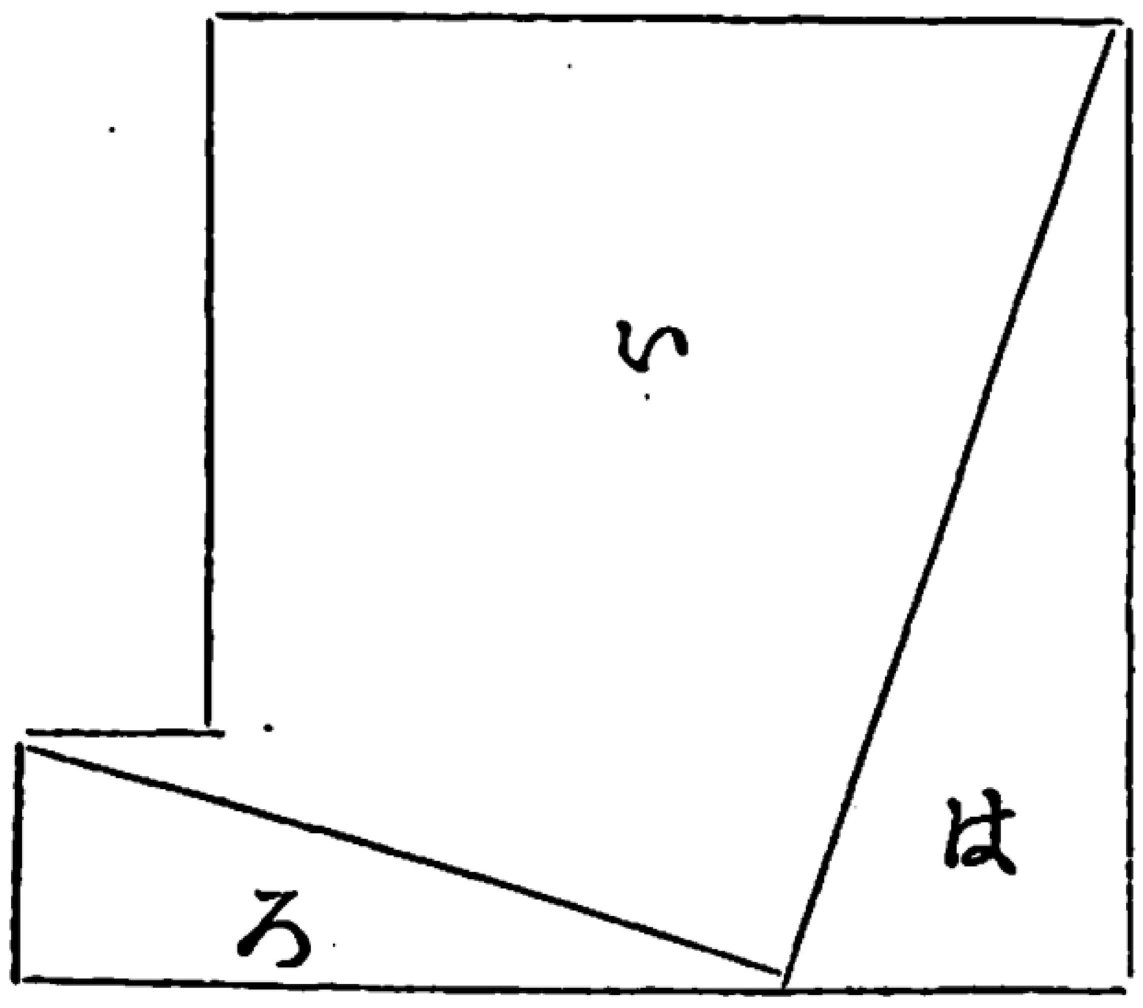
(4)或る二字を書し、之を倒に見れば其の字故の形にて、但し左字となるといふ。其の二字は如何。

（右出雲龜谷賢次郎氏出題）

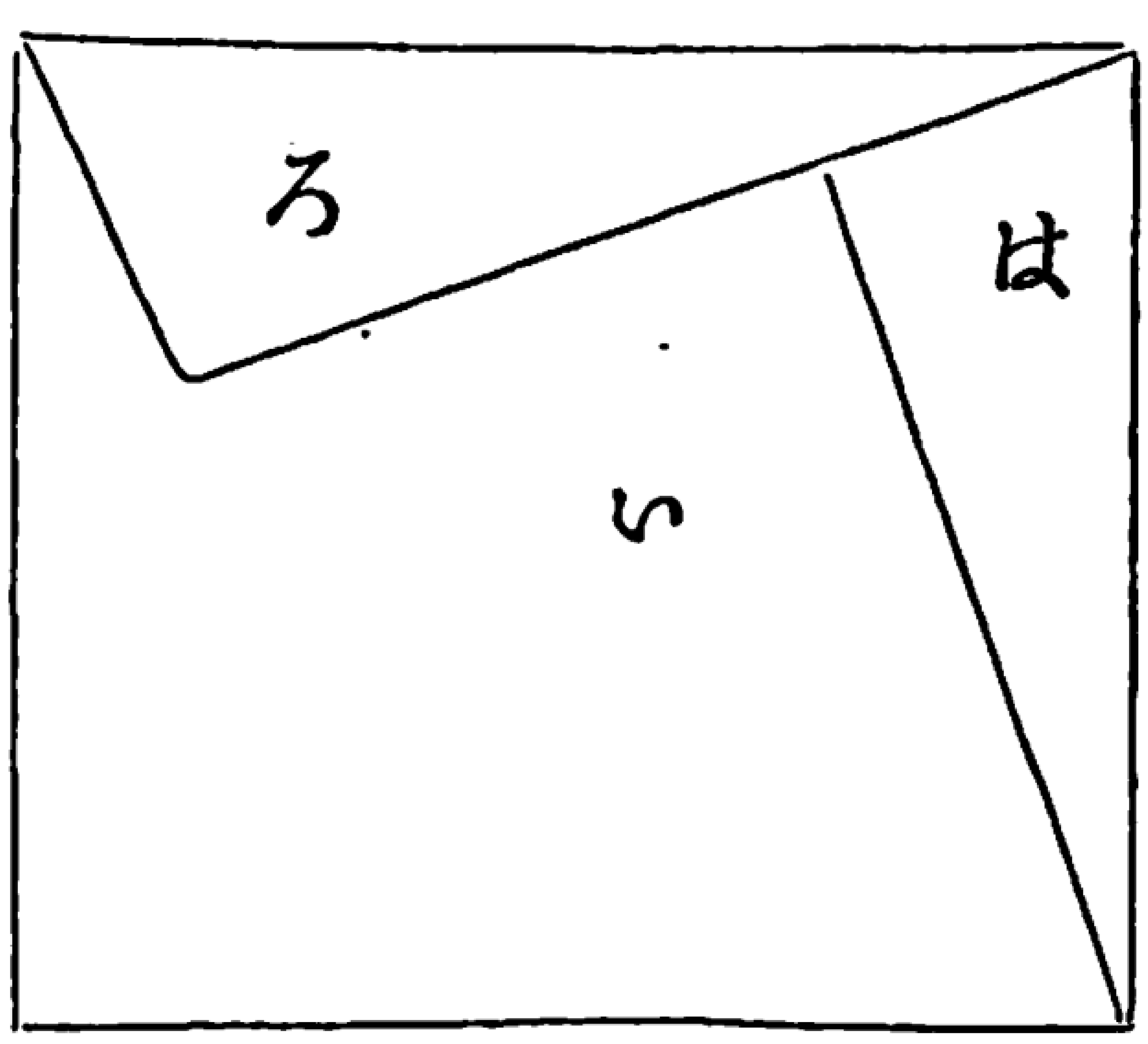
右四題悉く御當てになッた御方には本誌を一部差上げます。

○前號の考物　の解答者は七十八人でございました、其の中一題お當てになッた御方れ五十三人、二題ともお當になッた方は二十五人です。　兎に角次の通りで出來ます。

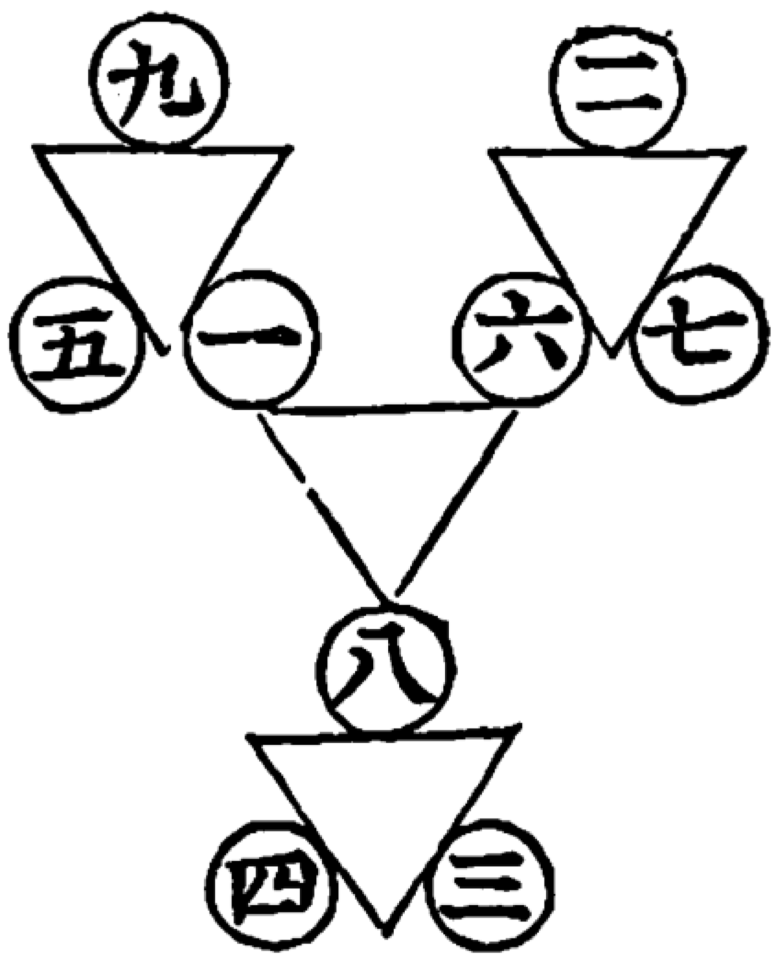
第一



切り離して合せると次の通りになります



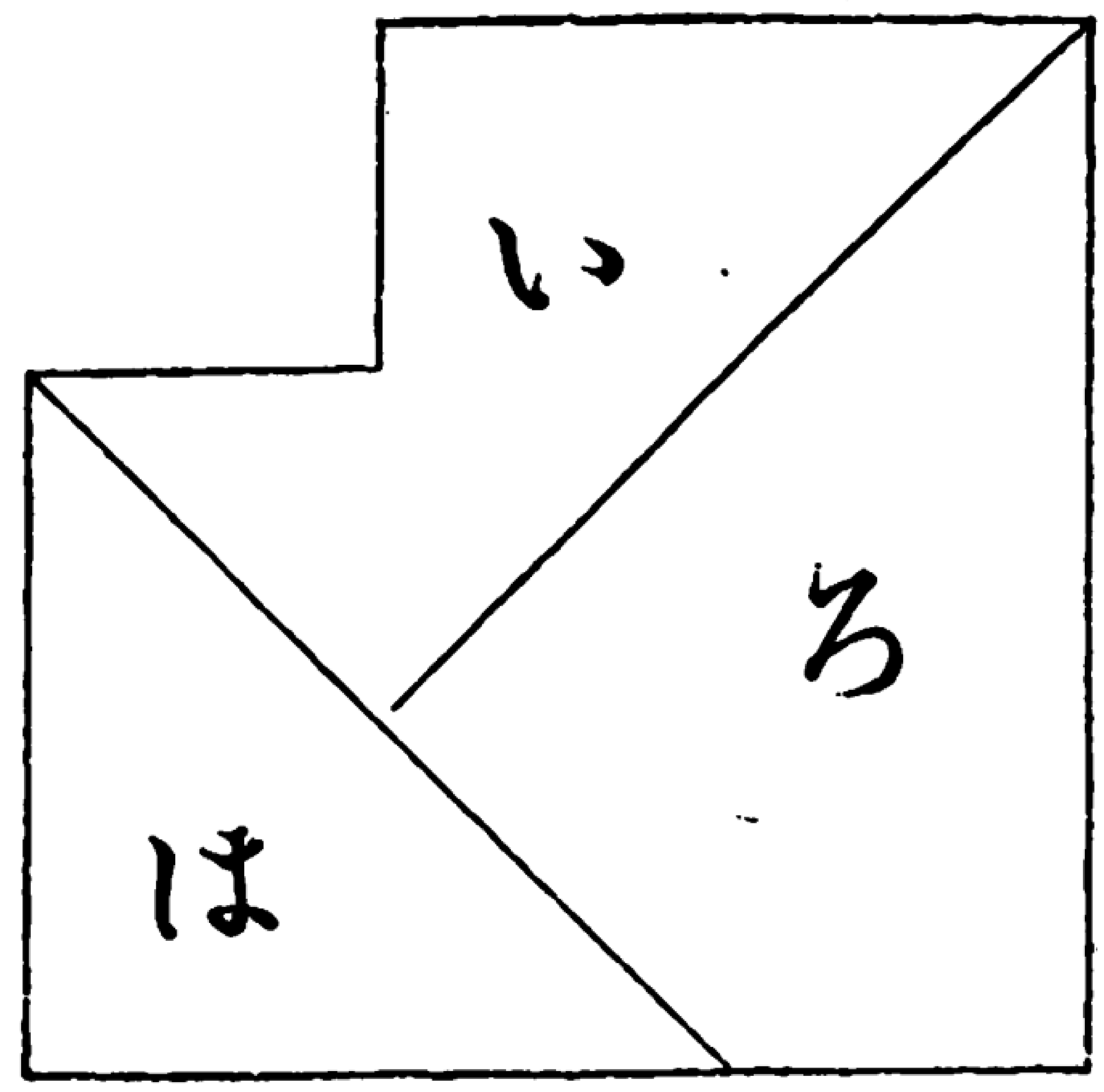
第二



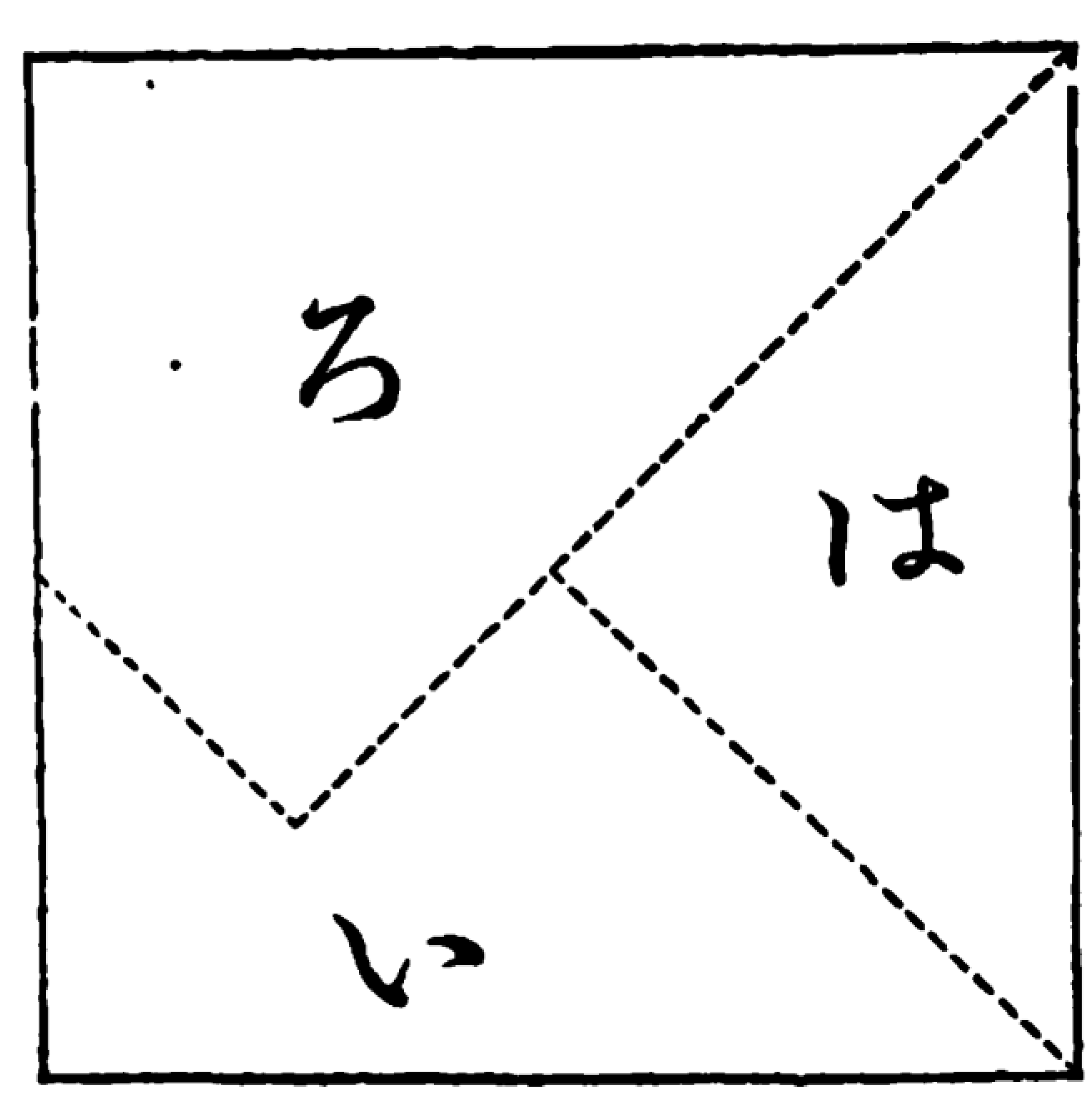
これでみな十五づゝになりませう。まだ次の通りにしかたがあります

6 9 72 51 8 43	2 1 76 59 4 38	7 9 62 15 8 43
6 1 72 95 4 38	2 1 67 59 3 48	8 6 43 72 5 19
3 9 48 51 2 67	3 9 48 15 6 72	8 2 34 67 5 19
まだいくらもありませう	1 6 59 27 4 38	1 2 95 76 3 48

〇前號考物解答の正誤　前號にては活版の間違でトンダ誤りをしました　あれではとてもいけません次のやうにせねばいけません



切り離して合せると次の通りになります





○日本現時の文學

誰もいふ、日本の現時は文學旺盛を極む、實に空前なり、又絕後なるべしと。然るに或人は曰く、出版の頻々たるを以て文學の極盛といふべからず、今日の文學者は先づ世の好尙を察し、唯だ多く賣るゝを標準として著作す、故に幾萬の出版ものあるも概ね纖弱軟巧、絕えて雄厚絕大の氣象なし。苟くも一等高着の見識を以て評するときは、正に今日は文學極衰の時代なりと。吾人は其の果して何れか當を得たるやを知らす、讀者諸君の判決は如何。

○東京學士會院の例會

十二月八日東京學士會院第百十五回の例會は、出席會員十七人にして、二時より講莚を開き、帝國大學雇敎師ハウスクチヒト日本の中學敎育の演題を講じ、四時二十分完了す。當日は都合に依り公衆の參聽を止め本院より案内狀を發し、來聽せし人々は文部大臣及次官其他文部省高等官、帝國大學敎授等にして、本院會員を合せ三十二人なり」との事實は其の十日の官報にて承知せり「都合により公衆の參聽を止め」といふ其の都合とは如何なる都合にや。吾人は是まで餘り其の說を承らぬハウスクチヒト氏の演說と聞き、當日こそはと兼て待ち設けたり、願ふに吾人と同感なるもの定めて多かりしならん。然るに都合……都合の二字もおそろし〳〵。

○謹んで上毛の青年に謝そ

大日本古來曾て廢娼論なるものなし、其の之れあるは實に明治年間に始る、而して明治年間未だ今日の如く其の盛んなるとあらず、其の斯の如くならしめたるは實に上毛青年の誠意と熱心とに依る。吾人は其の論運の或は一小挫折、一小沮遏に遇ふも、火の荒原を燒くが如く、風の枯葉を拂ふが如く、愈々益々壯に、大に、盛んに、上進して遂には必らず滿天下汚濁なる空氣を拂ひ去り得べきを信ず。嗚呼上毛青年の誠意熱心なるに對し、吾人は何如なる語を以て感謝すべきやを知らず。

○存娼論？尊娼論？

已れ既に廢娼の理論上當れるを知る、實際上亦當れるを知る、而して今日之を斷行するは、其の急務なるを知る、而して其の己れが汚らはしき行爲に反するを以て、止むを得ず、存娼論を主張するものありとは不可思議千萬なり。存娼論？尊娼論？

○廢娼論？拜娼論？

口、立派に潔白なることを言ひ、熱心らしく廢娼論を說き立てながら、其の心中は汚濁極まりて、柳巷花街に反對の攻擊をなすものありと聞く。是等の徒は吾人廢娼論者の列に置くべからず、宜しく之を拜娼論者中放逐せざるべからず。

○此の新年を奈何せん

吾人は廢娼の事に就き、尙は蝶々せざるべからさるものなり、聞き込みたることあるなり。之を說き之を報せんと欲すれども、此の新年を奈何せん　此の目出たき

新年を奈何せん。餘りに不潔なるとを記するに忍びず

○國文國史の學校

近頃大に國文國史の必要を感せしより、往々之が研究せしむべき校舍も出來たるが、未だこれぞ完全なりと認むるに足るものなきは吾人が平常大に遺憾とする所なりき。然るに此の度飯田町なる補充中學校の內に、特に右研究の學校を設け、來月中旬を期し開校すべき筈なりといふ。佐藤定介、元田直、松野勇雄、丸山淑人、等の諸氏の發企なりといへば、必らず完全なる校舍にして、或は吾人が渴望を醫するものなるべきか。

○鹿兒島女學校

鹿兒島婦人の姓質たる、誠實にして浮誇ならず、勇氣あれども輕慓ならず、能く節操を守りて信義に篤き、特殊の美質を具ふるにあらずや。然るに是等の珠玉と荊棘の間に放棄して、琢磨の勞を盡さゞるは、豈更に遺憾千萬ならずや。況んや社會の流弊は、其の珠玉の美質を變ずるの恐れなきを保すべからざるに於てをや。とは鹿兒島女學校設立の趣旨書なり。吾人は其の趣旨書にある如く、國家の爲め、西鄕大久保其の他幾多の英傑を出したる鹿兒島の婦人をして、更に幾千幾百の英傑を生むの母たらしめんことを冀望の至りに堪へざるなり。因にいふ全女學校の目的にする所は、彼半歐米、半日本の婦人を作るにあらずして、專ら日本婦人と養成するにあり、故に其の學科も漫りに其の程度を高尙にせず唯他日一家の良婦たるに適せしむるを主とするにありと。

○佛國工藝家の來着

一昨月下旬橫濱着、昨月八日上京したる佛國工藝家ロスペル氏は我が美術の實況視察の爲め、去る十一日は同國公使館員と共に遊就館、東京美術學校、帝國博物館等を巡覽せしが、尙は來年の內國勸業博覽會の觀察とも遂げて、秋季歸國する筈なりといふ。知らず如何なる眼孔を以て我が邦の美術を看るか。

○小楠公の祠

小楠公の祠につきては、已に讀者に報道する處ありたりしが、今又教育週報記者の言を借りて之と記さん「ちゝのみの父の敎へ、はいろは母の諫めにまろびて」甲斐〴〵しくも君のため、國のためとて一命を四條畷の草葉の上に委ねたまひし贈從三位正行朝臣の祠を、河內國讃良郡飯盛山の麓に有志者の經營するを、地方の父老も學童も、朝夕に贊け成して、略々既に落成の運びに至れることは、讀者の記憶にも留りつらん。去月十六日は畏こくも右四條畷神社を格別官幣社に列せらるゝ旨仰出されぬ。久しうして愈々光る臣子の鏡、年ふるまゝに馨りの高き楠樹、いつの世か「朽ちめやも」。

○美術の獎勵保護

と題して女學雜誌記者の論ずる所を見るに、實に其の着眼の高尙なるに感服せずんばあらず。吾人も實に同感なり、左に之を拔摘して讀者の劉覽に供すべし。

日々新聞にも美術論を見るに至れり、蓋し陛下が是眞翁に恩賜せられたる者あるに感激し、全社界が美術を優待する情の更に篤からんとを勸告する者の如し、之は在り來りの議論にして、時事翁の如きも亦毎々主張せられたるやうなれども、哲士は必らずしも之を喜ばざるべし、總べて獎勵保護せられく成立つものは兎角其の獎勵、保護者の好尙に偏し本來獨立の壯氣に乏しきもの也、學術にせよ宗教にせよ、學者宗教者自身の熱心によらず、只だ外よりの獎勵保護に由て盛んなる時には其宗教は多くは腐敗し學術は

薄弱なるもの也、就中美術に於て然りとす、吾人は美術が眞實に熱心に有力に彼自ら獨立長歩せんことを欲す僅に他力に賴りて發達するを望まず況んや之に貴族的虛飾的の臭氣を加へんとするに於てをや。

○名士手書の相場

西洋にては支那日本の如く有名なる古人の筆跡を珍重する事恰も美術品の如くならざるも英雄、豪傑、碩學、美術家等の手紙を集め秘藏するの風は、又往々見聞する所にて、殊に此の風俗貴婦人、令孃の間に行はるゝを見る。而して其人を尊ぶよりするはウヰリントン、子ルソンの類なり。畏るゝよりするはナポレオン、オーコン子ルの類なり。其他憎き者愛らしきもの、怖ろしき人、嫌はしき人、をかしき人は固より、種々の人迄も皆珍重せざるなし。余の如きも嘗て英國に在りし時或人に手書を求められたる事ありしが、何の爲めなるかと問へば、日本人の英文は珍らしとて婦人の笑草となるなり。今手書の相場附と題し「ペルメルバヂエット」に出てたるものあれは、其中著名なる人のみ撰みて貴社に寄す。と或る文學士より送られたれば左に相場付を掲く。(日本)

人名	圓錢	人名	圓錢
故アルバート王(ビクトリヤ女帝ノ夫)	一〇、三八	ビーコンスフヒールト伯	二一、三四
ベンザム	二、八〇	カーライル	六、七八
クロムウエル	八一、三六	ヂッケンス	一三、五六
ヂユマー(父)	二、八〇	フランクリン	二七、一二
カンベッタ	六、七八	グラッドストン	一〇、三八
ゲーテ	六、七八	ゴルトン將軍	一六、七六
ギゾー	二、八〇	ヘスチングス	一六、七六
ビクトル、ヒユーゴー	六〇	ハクスレー	二、八〇
ウヮシントン、アーゼング	二一、三四	サミユルヂヨンソン(ラセラスの著者)	一二二、〇四
チヨン、ロック(哲學者)	五四、二四	マルサス(經濟學者)	一三、五六
ルウイ十四世	一五九、五〇	ヂエーエス、ミル	二、八〇
ミラボウ	五三、九〇	マーシヤル、子ー	一六、七六
オーコン子ル	六、七八	トムペイン(道理の世の著者)	六七、八〇
ルーソー	二一、三四	ウホルトルスコット	二七、二一
アダム、スミツス	三三、九〇	タレーラン(佛國有名の宰相)	一三、五〇
サッカレー	一六、七六	ウボルデール	三三、九〇
ワシントン	一〇一、七〇	アイザック、ウワット	四〇、六八
ウエルリントン	四、八〇		

寄書

靜岡　篠原米作

あらたまの、年のはじめの、さかづきハ、君が千とせと、祝ふなりけり。

日のみはた、のきにかゝげて、あら玉の、としの光を、いはふ今日かな。

かどまつよ、あさひのみはた、立てそへて、君が千歳と、いはふ今日かな。

新年祝

○龍宮東京　水石居士

都すまゐの文(ふみ)の窓、
龍の宮てふ文(たまづさ)を、
筆を採りてハ記しおき、
影を消ふるごとくにて、
上野の寺の鐘の音は、
今ハ寒威(さむさ)もいやまして、
四方にハ人の靜りて、
心ぼそくもなりぬれば、
されど手足の冷えしまゝ、
學(まなび)の道に入らざれば、
たやすき業へあらぬかと、
何時(いつ)しか知らず成にけり』。
うきも辛きも是迄と、
戀(こひ)られぬとたゞみに。

寒さへ寒き冬の夜に、
つどりて見むと思ひたち、
ちゞに心を碎けども、
時をうつせしかひもなく、
はや一時をぞ知らせある、
骨にも徹るばかりなり。
風の音のみぞいとすごく、
淋き褥(しとね)につきにけり。
志ばし睡も催さず、
かくうきことのあらめやは、
思ひまへしてありけるよ、
あら恐しや世の中の、
いふ暇(いとま)さへあら波の、
はかなく沈む心地して。

四方のけしきハ八重霧よ、
糸の調べの音を清く、
庭の櫻の花の間に、
空行く雁の音を清み、
すごき冬よぞなりにける、
暫くありて乙女子の、
老ひたる杜の下よ涌く、
音を顧みいひけらく、
聞もれて音はたゆたはず、
こゝハ何處(いづこ)とたづぬれば、
日本の人と聞そからは、
入らせ玉ひと袖とりて、
辭(いな)むに辭みがたくして、
宮の一間に入りよけり。
うるはしきと限りなく、

おひ茂りたる森の間に、
細谷川の瀬をはやみ、
川の柳の風の上に、
いつしか過ぎて今ハはや、
見る夢さへもあぢきなし。
玉の井桶をたづさへて、
泉のかたよ來りしが、
山ある人よなへすらめ。
日本の國の民なるが、
乙女子近く走りより、
主姫(あるじ)がしるべのものならめ、
いさねむごろよ導くよぞ、
云ふがまゝく行き〱て、
そも此の宮ハひろくして、
世にたとうべきものもなし。

程なく此國にまかりなし、
千種のものなさころ狭(せ)く、
言葉しづかに申すやう、
賤しき住居よありぬれど、
いふも更なり百年(もゝとせ)も、
いとうれしげに見ねにけり。
又訝しくありければ、
來し故よくも知らざるに、
思へしまゝに答ふれば、
はしを下さぬ日はあれど、
力と恃むその人ハ、
凋むよ後るゝ松竹の、
世はうきものと聞きつれど、
思ひしためしは絶えてなし、
世の諺よもいふ如く、
兼ねてちぎりしとなれば、
生計(なりはひ)すべきものなるに、
姿をくろしめ玉ふさも、
されど聞入なきならば、
今より深く思まじ、
首をたれし有様は、
風になやめるふぜいなり。
人たがいにはあらづやさ、
たゞひつれなく思ふさも、
花よりもまさる姫君の、
取り調へて埜臓しつ、
よふこそ訪はれたまひしぞ、
三年(とせ)五年七年ハ、
こゝな去らさせたまひそさ、
吾はおかしく思へども、
そはあり難きとなれど、
止まるとハねならぬさ、
姫はたちまち色をかへ、
思ハぬ月さてはなきものを、
なさけなぞさの浮草の、
操なきこそかなしけれ、
かくあることゝハ夢にだも、
聞き玉はずや吾君よ、
本木(もとき)よまさる末木(うらき)なし、
互に助けたすけられ、
御身の愁をさけんため、
思ふまゝにはならぬぞよ、
思へど思ひしかひもなし、
さ髮の亂をかきあげて、
花に遊べる蝶々の、
吾ハいよくあやしみて、
問へば姫君頭をあげ、
多くななぶりぞ吾君よ、

御身が七ツの此春に、
よゝや忘れハし玉はじ、
あれと思ひましまさば、
妾が心の底までも、
是より外に思ひなし、
妾のことにてさふらふと、
煙の如く消え失せぬ。
障子の紙の破れより、
枕邊に立つ燈の、
夢の中にも昇をもて、
古き数もことへりぞ、
我が見し夢のたゞひかさ、
よしなきことをかくなむ、
言ひかはしたる言の葉ハ、
すつろさならば是非もなし、
しばしのうさを堪へ忍び、
學びつくしてたまはれよ、
學の道さいふものは、
いふより早く立上り、
吾は驚きめさむれば、
吹きくる風のいさつよく、
今や消ねむさしたりけり、
飲食ふものはなきものを、
さわさりながら昴宮は、
思へるまゝは錐さりて、

懸賞課題

○文明の母を讀む

一等賞を得たる二上長吉氏の文章ハ政治に渉る處あるを以て掲載を見合せたり

二等賞

○仝　東京　野村とき子

妾頃日友垣の許を訪けるをり、妾が友はくさぐの物の本をば取出でゝ、其々に得手勝手の品評を下しなどして其日短しと打ち興じつゝかれてれと見もて行くにゝそのうち文明の母てふいと麗しき雑誌ありけり。妾

受けて之を閲するに、中に記せる事共何れも有益にして且おもしろし。こは好きもの得てけりと、友に乞ふて之を借り受け、家に歸りて靜かに再讀するに、以前に増して其おもしろさはまた一入なり。その社説の莊重にして深玄なるは、以て人を感服せしむるに足り、其論説の精確にして純正なるは、世を陶化する力に乏しからず。ことに關場ぬしのものせられたる論文の如きは、鐵中の錚々とも謂つべく、其論議の藹然として文藻の燦爛たるは、近頃稀に見る所のものなり。其ほか佐ゝ木翁の雅馴にして通暢なる歌文、鳴立庵主人の滑秀にして温麗なる小説、千紫萬紅の如き雜錄、歌ひ笑ふ鳥の如き彙報なんと、拙き筆には一々述べ難かり。（但し懸賞の考物はあまり子供らしくてをもしろからず、又挿畫も一層の意匠あらまほし。）扨また家政學講義錄なんどに關する事は如何といふに、家政學には關場氏の衛生育兒法あり、又講義には綿條女史の竹取物語講義ありて、またあます所なし。おしなべていへば、此の文明の母は西洋科學の粹と、日本文學の長とを一身に集め、健剛にして優嫺なる品質と温篤にして高尚なる容儀とを體せり。嗚呼斯の如くにして始めて文明の母の名眞に空しからずと謂ふべし。妾近來の世の有樣を見てけるに、女學に關する物の本雜誌なんど、其數實に尠なからず、されど完全にして而かも卑きに流れず、高きに失せず、能く中庸を得たるものはいとゞ罕なるとりからこの文明の母を得て、さながら砂礫の中に黄金を得たるの思ひあり。さあれ妾はかゝる貴き女學の雜誌を得るに付ても、世の姉妹方に對し妾の希望する所一にして足らず。たとひ有益の物の本は云も更なりかゝる良好の雄誌は日を追ふて増加するとも、世の之を購求するも、只之を玩弄物に見做し、讀めども考ふることなく、感ずれども行ふことなくして已まんには如何に貴重なる物の本といへども、遂には紙屑と其價を同ふするに至らん、豈歎かはしきことにあらずや。されば世の雜誌を愛でつる姉妹方は、之を讀んで有益なる智識あれば、能く味ひて腦裡に收め、又適切なる學藝あれば、充分に咀み碎きて胸底に積み重ね、以て將來立身興家の一班を助成せられんと、妾がこの善良有益なる文明の母を得ると共に、偏に願ひまひらす所になん。穴賢。

〔三等賞〕

○仝　　東京　田中龍灑

或夜事ありて親しき人の方訪ひ行きぬ。時がらの珍奇かなる事どもかたりあへるまに／＼、隙隔て、樣々の古き文書あるは近頃の物種の雜誌など品評しつゝありけるが、ろが内に文明の母の事にうつりけり。これたのが常に愛けるものにしあれ婆、耳欹てきゝぬ。いと打ちとけて睦しく語り合ふが中にも、語づかひにも聲がらにも、年若く聞えぬるは妹子にもあるやらん、先づ言ひ出でけるは、わらはそが家政となん記せる内を讀たる度毎に思ふ其注意の周密なること、さながら常々母上の給へる事とひとしく、實に世の淑女の母と

も申すへけれと。又次待兼ぬる小說、別きて山縣ぬしの敎育の譚、鐵筆先生の淑女の卷なと、樂の月は心の鏡に照りはひ、成長し後の事なと思ひ出れハ、心苦しくも有るなれ、と言ひ終りて暫時言葉もとぎれけるが、こたびはろが姉とも思しく、爽かに語り出てけるは、わらは雜事記せる所讀む每に、心に感くる事とも多くあり。世の友どちの日々進み行くを喜べるまに〳〵、又醜き事の多くて聞くもいとゞ悲しく、いかめしき筆の誅にハはちろう斗りなり。又花咲き亂るゝ文の林、いとよき枝折にこそあるなれと說き終り、文藝のうちの或る哥くりかへし、讀み居りけるが、やがて最姉にや有るならん、いとおごろかに言ひけるは、みなたのが思の程だうりあり、さらばわらハは其のもる、ものにつけ思の丈を述べん。世の中に只一ト筋の眞心もて、信かにたのが思ひをつゞくると、いみじう難き業よて、世の風に誘ハれて、賴みてし胸の帆、心の綱も敝れ易く切れ易き者にて、なげかはしき事なるが、此の社說こそ莊嚴かに倚らす偏らす、われらが目標となるぞ愛たし。又其の心とよみしてか、數多事助けする人々の寄書、はめたゝへずともわれらが受くる利益の程は、

紙塡めする杜撰の多き世に比へうものもなし、と年嵩丈ヶ充分に說き出されけり。實に寄集へば盲人すら鼎を知るのたとへ、まして今の世の淑女が母の品評、なゞいみしき差異やはある。此姉妹等がくさ〳〵の品定め、纒めなばわが心に之も似つかはし。されば事終り家に歸れゝ後、閑かまゝをかくなん綴りぬ。

〔四等賞〕

○全　　茨城　宮本惠之助

天下の玉此の如く其れ衆く、然れとも吾人の珍重を受くる者誠に稀なり。世界の石此の如く其れ多し、然れとも吾人の好愛を蒙る者寳に少し。是れ蓋し玉石の美良なる者稀少なるに因る。夫れ玉の美なる者は吾人之を珍重し、石の良なる者は吾人之に好愛す。玉石に任りて既に然り、況んや新聞雜誌に於てをや。方今我邦漸く開明の域に進み、新聞雜誌の業大ひに世に行はれ、每日發行の甲新聞あり、隔日發行の乙新聞あり、每月發行の丙雜誌あり、隔月發行の丁雜誌あり。特に女子敎育論男女同權論の世に盛なると共に、女子に關する新聞雜誌の發刊日に月に多きを加へたり。然れとも新聞雜誌の衆多なるは、猶玉石の衆多なるが如く、其美良なる者に至つては甚だ稀少なり。抑も不美不良なる衆多の群を離れて、高く美良なる稀少の類中に光明を放ち、以て吾人の珍重を受け好愛を蒙る者、玉石に金剛石あり、新開雜紙に文明の母あり。夫れ此の雜誌の美良なる所以は、其性質と主義とに在り。主義は目的

たり、性質は之を達するの方策たり。蓋し此雜紙の主義即ち目的とせる所は此の雜誌の性質即ち方策に因りて、女子をして完全なる母たらしむるに在り。抑も此主義たる眞理に問ふて正しく、實際に照して善なるを見る。夫れ男女同權の說起りしより、世の新聞雜誌にして男女同敎育同職業を主張する者多く、皆な痛論して曰く、男女同權たらんには男女須く敎育を同ふし職業を同ふすべしと。是に於てか女子にして男子の敎育を受け男子の職業を執らんと欲する者あり。然りと雖も自ら男子は是れ男子にして、自ら女子は是れ女子なれば、男子に施すに女子の敎育職業を以てすべからず、女子に與ふに男子の敎育職業を以てす可からず。男子にへ特に男子に適したる職業あれば、特に男子に適したる敎育を以て之に施さゞる可からず、女子には特に女子に適したる職業あれば、特に女子に適したる敎育を以て之に施さゞる可からず。男子に適したる職業とは何ぞや曰く人に父たること是れなり、女子に適したる職業とは何ぞや、曰く人に母たること是れなり。夫れ男子と女子と其敎育職業を異にすべきこと此の如くなれば、其女子を養成するには完全なる母を造ることを以て主義となすとの正善にして、不完全なる父母の混合物を造るを以て主義となすとの不正不善なる固より言ふを要せざるなり。又此雜紙の性質たる、能く其主義を達するの方策を備ふる者にして、先づ第一段に公明正大是非を斷すると利及の如き社說論說あり、第二段に一讀して忘る能はず、再讀して手卷を釋つ可からざるの文藝小說あり、第三段に喜ぶべく悲むべく怒るべく笑ふべきの雜紀彙報あり、一も皆心を利し身を益する所以の者に非ざるはなく、人に母たるべきの敎育を授くる所以の者に非ざるはなし。予性好んで新聞雜誌を讀むと雖も、未た嘗て此の雜紙に對する如く珍重好愛せしあらず。是を以て每に以爲らく、一片の思考を描して以て重愛の情を表せんと、近日偶文明の母を讀むと謂へる課題の出つるに遇ふ。因りて記して以て之に應ず

社告——謝告

吾人は謹で愛讀諸君に謝す本號の發行大に遷延して今日に至りしを謝す吾人が怠慢の罪固より逭るゝ所に非ずと雖是には又大に事情あり吾人は實に勉勵して起草したり編輯したり常よりも早く發行すべき樣力めたり然るに從來印刷處の不勉强なる遂に吾人をして爰に謝告を要せしむるに至れり而して印刷の大に遷延し吾人をして汗を握らしめ諸君をして待ち詫びしめたる實に今回に限らず故に吾人は愈々斷じて本號より印刷處を換へ爾後一日も期日を誤るなきを期す且聊か其謝罪を表せんが爲め本號には御覽の通りの大附錄を添えたり吾人は信ず寛大なる讀者諸君はしばらく之を以て吾人の罪をゆるさるべきを

●廿三年新刊書豫約廣告●期限後ハ必ズ正價ニ復ス●

矢野龍溪先生閲、井上寛一、枝元長辰、村井寛君同編

内外 百事便覧

毎年一月刊行

最上等洋裝美本總クロース金文字入
紙數五百頁餘
正價金七拾五錢　郵送費金十錢
豫約廉價金六拾五錢　郵券一割增
申込期限二月十五日
送金　郵便爲替(本局宛)又ハ通運便
送本　一月七日ヨリ
部數　二千部限

廿三年ノ新版出來致候大ハ海外萬國ノ形勢ヨリ小ハ國內日用ノ百事ニ至ル迄一書ニ網羅シ遺ス所ナキハ歐洲諸國ニ行ハル、「アルマナツク」ト題スル書ニシテ此一書ヲ座右ニ備フレバ年中百事ヲ閲覧スルニ於テ其便言フベカラズ故ニ諸國ニ於テ毎年年首ニ其刊行アルヤ人トシテ之ヲ購ハザルハナク戸トシテ之ヲ藏セザルハナシ百事便覧ハ即チ是レト類ヲ同クスルモノナリ矢野龍溪先生ノ註文ニテ昨年ノ始メ本書第一回ヲ出版セシニ果シテ好評ヲ博シ廣ク江湖ニ行ハル本年ノ新板モ豫定ノ通リ此度發兌ノ運ヒトナレリ前版ニ比スレハ最モ正確ニ最モ新シキ事實ヲ撰ビ殊ニ全世界統計ノ部ニ著シキ改良ヲ加ヘ紙數モ亦タ百頁餘ヲ增加セリ其事項件數ノ多キ事知ルベシ且ツ其定價モ前版ハ九十五錢ノ處新版ハ九十錢ニ引下ゲ尙ホ御便利ヲ相謀リ來ル二月十五日迄ニ申込アル愛讀諸君ニ限リ特別廉價ヲ以テ販賣可仕候間陸續御申込アランヿヲ冀望ス

發兌元　**報知社**

專賣所及豫約申込所　東京日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地　**長島恭三郎**

豫約申込所　●東京丸善●博聞社●敬業社●集成社●辻文●三友●吉川●大倉●林平●大阪松村●熊本長崎●山形五十嵐●福島萱間●名古屋川瀨●長野西澤●越後水原西村●埼玉長島●其他各府縣書林

●**美人**とならんと欲する者は**注意**せよ

佛國新流行の化粧藥法●貴婦人淑女社會の最必要法

男女 肌膚(はだ)を艶滑(つやよくなめらか)にし膚理(きめ)を軟密(こまか)にする一大新法(いちだいしんはふ)

文明社會交際場裡の人士は己に居住、衣服、帽、靴、等を清潔無瑕ならしむる責任あり況んや吾人天然の皮膚に於て清潔無瑕の美稱を受け得ざれば人たるの品位に於て劣り陋しきの辱を免かれざるべし身體膩垢の外殊に皮膚の瑕瑾とも稱すべきは顔面手肢の粗糙、口唇の胝破等にして汚垢の如きは石鹸にて一朝に洗ひ去り得べきも以上の瑕瑾は平生皮膚の攝生に注意し寒暑の氣候を問はず怠らず手を盡して之が回復の道を求むるにあらざれば清潔艶美の場合には至り難し彼の西洋婦人俳優の雪膚氷肌の皎潔潤澤艶麗なるは豈に徒爾にして得たる者ならんや常に肌膚攝生法に注意するの結果たるや明かなり本館此護肌法を發明せんと西洋大醫に計り學理に基き多年種々經驗苦心して漸く今回奏効確實なる前掲新法を發明したり此法は泰西貴婦人の專ら賞用する「コールドクリーム」及び「ポマドンヌール」の製法を基とし且つ本館の經驗せし結果とを折衷せし新法にて此法を施すときは男女共肌膚を艶滑にし膚理を軟密にし如何なる粗糙質の皮肌も忽ち艶美軟密となり胝、霜燒、垢切等は決して發せざるは勿論既に發せしものは直に全治し艶麗なる雪膚氷肌となす特効確實なるものなり製品は高尚なる香氣を有し皮膚に塗用して無色透明なり依て有志の方は速に傳習實施して艶膚麗肌の譽を得取せよ●但し此新法は世上にありふれたるおしろいしたり或はりすりん類の如きものと同日の比にあらざれば玉瓦混視することなかれ●此法に要する元質藥品は各地都會にて求め得らるゝ事●此法の傳授謝金は壹圓五拾錢の規定なれども今や歳季嚴寒に際し都陋人士一般最も此法の速急必要の場合なるを以て普及を圖る爲大特別にて一月卅一日迄の傳習申込者に限り謝金額三分一即**金五拾錢**に傳授書を郵送すべし尤も期日の後は直に定額謝金壹圓五十錢に復する事●郵便小爲替は神田郵便局宛取組の事●謝金に切手代用は三割增の事實地經驗奏効確證●佛國「ミエル、ブ、パリ」の藥法

●男 全體の色を白くし且 女 艶美ならしむる新法

此法の傳授謝金は壹圓五十錢なり

本館の詳細なる各種傳授科目規則書を望む方は郵券四錢を送らるれば直に送呈す

東京神田末廣町十番地

日本授産館

館長野上三省

新發明各色改良染液正法及理化學的醫學的應用諸發明新法傳習所

顧問員 **英人エフ、ヘンリー**

●**粗糙質の人**は必ず右廣告を**熟讀**せよ

文明之母第十三號目次

文明之母第十三號附錄目次

文明之母第十四號目次

文明之母第十五號目次

文明之母合本 第壹

定價上製五十五錢　並製五十錢

自第壹號至第六號　紙數凡四百頁　全國無遞送料

第一目次

文明之母合本 第貳

自第七號至第十二號 紙數凡五百頁

定價上製六十錢 並製五十五錢 全國無遞送料

第二目次

小説

批評

雜録

謹賀新正

東京小石川區大塚辻町外

關場不二彥

恭賀新年併祈愛顧諸君清福

中村一

賀明治二十三年新年

小西吾造

恭賀新年

長島恭三郎

謹賀新年

大矢森之助

◉再版出來せり

此書發行後未だ半年ならずして初版五千部を賣盡せり以て世評の如何を知るに足らん今茲に再板成る依て江湖の諸君に報す

南翠外史著

小說 唐（から）松（まつ）操（みさを） 全

再版

總クロース
金字入最上美本
賣價廿八錢
郵送稅四錢

苟くも目に小說を見るものは我が文壇の老將に須藤南翠其人あるを記せざるはあらざるべし南翠先生の文章は流麗婉曲よして讀む者倦むを覺えず南翠先生の想像は富贍强大にして千百讀くるを知らず其の婉麗なる筆を以て其の豐贍なる奇想を描きたるものは我が「唐松操」とす此書唐松操なる一浪士が妖怪を退治て大いに英名を京攝の間に轟かし進んで天下の大法官となり大義高潔の名を得るに終ると雖も其間幾多の轗軻不遇を寫して剩さず理想と見れば理想、歷史と見れば歷史、寓意と見れば寓意、其の結構したる所の境遇れ讀者の境遇に依つて如何にとも觀察を下さるべし是れ「唐松操」が出色の妙地なりと爲す論より證據先づ一本を購ふて繙き給はゝ書肆の多辨を俟たずして快と呼び奇と叫び妙と稱へらるゝと疑ひなし

發行所　文昌堂　長島恭三郎
東京日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地

（遞信省認可）

文明之母

文明之母には毎號かならず美麗なる插畫あり

文明之母は紳士も淑女も共に必讀の雜誌なり

莊重なると山の如きは文明之母の社說なり

奔放なると河の如きは文明之母の論說なり

甲斐〴〵しき蜂の如きは文明之母の家政なり

うつくしき蝶の如きは文明之母の文藝なり

能く照らす鏡の如きは文明之母の批評なり

潔く面白き月の如きは文明之母の小說なり

千紫又萬紅花の如きは文明之母の雜錄なり

歌ひ又笑ふ鳥の如きは文明之母の彙報なり

文明之母には毎號をもしろき懸賞の考物あり

文明之母は永久に保存して利益ある雜誌なり

文明之母の事業を贊成し論文を寄せらるべき諸君は左のごとし

法律學士 磯部四郎君
畠山健君
醫學士 小川三之助君
落合直文君
岡本武雄君
渡邊修二郎君
田中登作君
高等女學校教諭 中村秋香君
中川重麗君
哲學館講師 內田周平君
山縣悌三郎君

山下重民君
文學博士 小中村清矩君
高等中學校教諭 小中村義象君
佐々木弘綱君
文學士 三上參次君
島地默雷君
農學士 志賀重昂君
醫學士 關場不二彥君
華族女學校教諭 關根正直君
須藤南翠君

（右イロハ順）

明治廿三年一月三日印刷出版

（東京々橋區弓町耕文社印行）



文明の友

第十六號附録

筆始

年々かはらぬものは、羽子板の音、門松の色しかる去年のまゝなるはなく、俤の若水にうつるを見ば我をそゞろに驚くべし。とつて十六といへば若けれど。文明の母となりては、世の娘と一ッ幼かるべきや。老年鏡に向ひて、小鬢に霜を嘆くを思へば、一ッづゝも來る春を、たゞ嬉しみてむざと過さむは無念なり。文明の母は月とに眉目清らに才藝世に耆くなりゆけば此の春年賀のお姿拜まばやと、待人多しと聞くに、いよ〱さもあれかし、勉めたまへと室咲の一枝に書添へて御受納被下度候。

一月一日

紅葉山人

文明之母第拾六號附錄

雪中松柏愈青々

内田遠湖

この篇は原題を「千八百十三年に於ける普魯生人民」と云ひ獨乙祖國歌の作を以て有名なる愛國詩人アルント氏の著に係れり。頃ろ秋之夜廼漫筆に載せたる「亂世婦人の狀況」を讀みて、大に感ずる所あり、因て一夕燈下に就きて之を譯す、讀者當に彼の記事を參看して、當時の情況を想知すべし。

「千八百十三年」は、實に獨乙人民が永遠の記念とすべき歲なれバ、予の譯も原題に從ふを適當とすれども、文字の餘まり長きを厭へバ、支那古忠臣の詩句を取りてかくは名けり。鈍廼風流士氏の譯文は、洵に感服したれども、「亂世婦人の狀況」と云ふ「亂世」の二字は、獨乙婦人の心情に對し、予は之を言ふに忍びず、何とな

れば當時婦人の眼中には、獨乙自國に亂世なし、獨乙婦人に亂世的の所行なし、獨り之を騷亂せしめたるナポレオン並に佛蘭西人あるのみ。聊か附記して一考を乞ふ、

我等が忘るべからざる千八百十三年の春と夏とに於ては、メーメルよりデンミンまで、コルベルグよりグラッツまで、本國を救はんとて、獨乙を獨立せしめんとて普魯生人の中に、唯だ一の聲音、一の感情、一の憤怒、一の努力ありしのみ。普魯生人は戰はんを欲せり、危難を欲せり、死せんを欲せり。彼等は和睦を怯れたり、何となれば彼等はナポレオンに對し、決して譽れ多き和睦を望むべからずと思へばなり。

戰！戰！カルパーテンよりオストゼーまで、ニーメンよりエルベまで響渡れり。戰！貴人も叫べり、破産したる地主も叫べり。戰！最後の馬を驛傳と挽車とに御ひ殺したる田夫も。戰！家宅と地券とを蕩盡したる市人も。戰！一の職業を見出し得ざる傭夫も。戰！我が一個の息子を戰場に遣はしたる寡婦も。戰！榮譽と悲痛の涙を揮ひ

て決然我が良人を離したる新婦も。

未だ防禦に堪へざる少年も、既に頭白く膝の顫へる老人も、瘡痍と不具とに因て長く擧れある非職となり居る士官も、富みたる地主も、官員も、兵役を免せらるゝ夥多の親族を有する家主人も、繁忙なる職業の管理者も、皆自ら辭するを欲せざりき。獨り此れのみならず、處女等は種々に扮裝し變容し、相爭ひて兵器を執れり。皆操練し武裝して、本國の爲めに戰ひ且つ斃れんを欲せり、何れの市街も、何れの區域も、何れの村落も、軍氣と軍樂とより鳴り響きて皆操練場及び造兵場と變成せり、何れの烟突も、皆造兵に用ゐる鍛房となれり。

ての尊き熱心と、この歡ばしき雜沓とに際し、位階の尊卑も、等級の上下も、年齡の長少も、皆遺忘せられ、廢棄せられしは、何等の美事ぞ。何れの人も皆自ら屈從して、職務に赴き事業を採り、「本國及びその獨立その名譽」と云ふ一の大なる感情は、あらゆる他の感情を、倂呑し、あらゆる他の目的と關係とを廢棄して、一人として使用に堪へざる者はなかりき。され

バ人皆感じて謂へり、「我等は久しき不幸に因りて、同等となれり、又職務と服從とに於ても、同等となれり、」

此の如く尊き義務と、共同の努力とは、一時に奮起したり。されども此の忘るべからざる日の尊き奮勵心は淫肆或は凶暴に因りて、自ら汚瀆する等の事は、決して少しもあらざりき。健き男子が直ちに武器を提げて、戰場に向ひしと共に、柔和なる婦人輩は、出陣者、病者、傷者の爲めに祈禱を凝らし、熱情なる忠告を述べ、業務を操り、介抱を勤め、勞動を事とせり。誰れか復た當時の情況に激動されて、義捐喜捨したる物品の夥しきを數へ得る者ぞ。誰れか復た各處の家屋或は醫院に於て、裸者に衣せ、饑者に食はせ、病者を介抱し、傷者を繃帶する婦人處女の永く本國に遺さるゝ芳名の衆きを數へ得る者ぞ。此の如く國の一の盡頭より、他の盡頭まで振ひ起きて、一の偉大なる賴もしき人民の成立せしは、實に一大驚歎の事と謂ふべし。

遠渺子曰く、シルレル嘗て言ふ、善く感覺と理性とを調和し、義務と意

向とを調和する者これを稱して「美なる精神」と曰ふ。「美なる精神」は曾て他に向ひて、その報酬を求めず故にその人世に發表するときは仁惠なり。「美なる精神」は善を行ふことを恰も氣性より發し正義の爲めには鼎鑊を視ること飴の如しと。嗟呼獨乙自由軍の際の婦女の「美なる精神」饒きは、アルント氏の此文を觀て知るべきなり。因て憶ふ、昔し蒙古の我國に來寇せし時先づ對馬島を攻め、その男子を降さんと欲す、男子從はず、又その婦人を降さんと欲し、繩を以てその手掌を貫くに至りしが、一人として降る者なかりき。此れ豈に東西を相隔てゝ、俱に千古の美談に非ずや。顧ふに方今の世、萬國玉帛を執りて相通じ宇內復た那破崙、忽必烈の如き者あるなし。然れども綠眼紅髯氣揚々として視耽々たる者我れ安んぞその中に貪ることを狼の如き者あらざるを保せんや。今夫れ燧石は、其質徒らに堅白のみ、打てバ則ち激して火を發す、今夫れ薔薇は、徒らに紅艶のみ、壓すれバ則ち香芬愈々烈し。異日國家不幸にして一旦外壓の變に逢はゞ、我が秋津洲の婦女子は、悉く將に清操剛節、

昔時對馬の婦人の如きあらんとする乎、抑も將に慷慨勇烈、その芳名を千載に流す、獨乙自由軍の婦人の如きあらんとする乎、吾れ此篇を譯するに臨みて深感あり、



束髪色なる
がんの内 かゞみ餅

漣山人

○春の初めの歌留多遊び
勝たれぬもの泣く子と地頭

今の束髪に浦田鐵子と云ふがあッた。父は子爵松村家の家扶浦田金太夫。御長家を拝借して毎日御殿へ出仕。家令何某の下廻はりを務め、禿顱と小倉の袴の膝ひからして、お役目大切とやッて行くので、出入の者に受けがわるいかはり、殿様奥様のお覺は目出度く。給金も去年の暮二圓御加増に成り、月十二圓で三人暮らしだが、岡目に知れぬ内々の收獲もあッて、隨分とため込だ様子。でも表向きは一かう見すぼらしく。女房の晴れ衣裳は、古風な、小紋の一點ばり。七八年以來更に變らず。むかしのものは善く持ちますのサト。でも濟ましたもので

……○

一人娘のお鐵は、此の正月で丁度二九の春をむかへた。番茶も出花、ましてこれは別製の玉露。生れ付いてみめ麗はしく、愛敬十分にあッて。世が世であらうならば、奥むきの腰元から成り上ッて、何の方とあがめられ。あッぱれお家騷動の女主人公にされ兼ぬ代物。明治の御代だけに、その出世も出來ぬが、兎に角鳶の子の鷹だと家中での評判、當人よりは親が嬉しく、目を掛けて育てはするもの丶。根が貧乏士族の娘。じだんだ踏むでも石龜は、雁と首引きもならぬわけ。琴や三味線、茶の湯生花、それはお姫樣の遊ばすと、吾々共の娘が僭上の業だ。それよりは裁縫でもしッかり仕込で、手の業を固めるが、まさかの時の用にも立つと。治に居て亂を忘れぬ、さすがは武士氣質。何處までも勘定づくだと惡るく云ふたものでない。そこでお鐵を學校へやる片手間に近所の仕立屋へ通はせて居たが、その後ある人の進めで、今では女子職業學校へ通學。元來が器用な質と見へて、此頃ではめッきりと上達し。取りわけて縫取りが巧く、先度皇后樣のお出での節、お買上げになり





ましたゝ、母親が吹聴して居た。

さて又此松村家に、銀子と云ふ姫があつた。お鐵よりは一ッ年下、松村令嬢と慈善會の名簿にのせられ、お姫樣と家中で云ひはやされるのを聞いては、どんな美しい方かと、氣の早い者は見ぬ戀にあこがれもしやうが。見ると聞くとは大した違で、肉肥ねて肩廣く。色も白い方ではなくて、口無作法に割けた鹽梅。これをむき出しにしたら、房州の濱邊にころがつて居さうだが。白いもの紅いものコテ／＼と塗りたて、入れ毛の束髮高くうづまかせ、大形の花かんざしをさし、衣裳綺羅を盡して作りたてると、どふやら姫君と得心されるのも不思議だ。でも親御の目には衣通の妹分位には見るか。幼い時分から甘やかしてそだてた結果で、飛んだ我儘なお姫樣になり。此歳になつても癇癪が止まず、此間も何か氣に入らぬことがあつて、腰元の頰を引かき、つまらぬ散財をしたとやら。その上隨分はねつ返りで、日本服はどうも不活潑だと、平常衣まで洋服にし。家鴨が文庫ト陰言云はれるのもかまはず、去年

の夏から英人ナットの許へ通つて舞蹈の稽古。學校の課業よりは此を大切よ思ひ。琴は舊弊だと排斥してピヤノを習ひ。暖くなつたら馬を敎はつて見たいト、今からねだつて居ると云ふ仕末。

此の正月二日。今夜はお奥で歌がるたを遊ばしますから、お鐵さんにもお出でなさいましト、腰元のふれこみよ、お鐵は好なうたがるたと聞いて嬉れしく。母親の許可を得て、晩方から御殿へ上り。此間の煤掃の時はじめて這入つて見た、奥の廣間へ通つて見れば、中ハはや割れるばかりの人。姫の學校の友達六七人。名も知らぬ若い男四五人。その他家中の者腰元共、合はして廿人あまりの人數。ワヤ〳〵云つて居る眞中に、銀子が主人顏よ出でしやべつて、何か大な聲でしやべつて居る。お鐵は襖をあけ、半身さし入れて辭儀をすれば、一人の腰元が見付けて、

「お鐵さん遲いとテ、此方へお這入なさいナ。お孃様お鐵さんが……。

「鐵が來たかイ。サお這入り。鐵は上手だから組よなると德だよ。

お鐵は會釋して中へ這入り。皆樣御免遊ばせト、口の中で云つて一禮
をした。
見れば、まだ肩揚げの取れぬ黄八丈の小袖、小紋の下着。これはチトじ
みなやうだが、母親が着て居たものとあれば是非もない。綿七絲の丸
帶に。去年殿樣が西京へお出での節、お土産に頂いたト云ふ友染の帶揚
げをしめ。頭は撫でたての束髮、まつ黒な前髮まつ白な額にかぶさり、
人中へ出た故か少しポーッと來た風情……始終うつむいて居る處、一
入しはらしく、若い男客の眼は、云ひ合はした樣に、交る〳〵お鐵の方へ
注いで。一度組に成て見たいト云ふ野心、どの腹の中にもあつたらし
い
三四合の戰ひに、味方も敵もやゝつかれたので、暫時中休みをト、各々思
ひ〳〵に分れて、金切り聲も暫らく途切れた。
「お茶を入れてお出で。そして蜜柑でも……。」
姫の命に、二人ばかりの腰元は立て次へ行くが、程なく茶を入れ、蜜柑を

持つて來た。
「サア皆さんおあがつて下さいナ。御遠慮はいやですよ。
云ひながら、毒味に一ッ取て、
「ほんとに咽喉が乾くとキ、ほんとにあついのネ。田川さんてばひど
い方だよ。妾の手をこんなに引かいて……。今度かたきうつてや
るからいゝ。
「さうですか、それはどうもとんだ事で。療治代でも出しましやうか。
へゝゝゝゝ
冗談を云ひながら、田川は床の間の方を何の氣なしに見たが。梅と氷
仙の活かつて居る、大きな花瓶の臺に敷いてある、きれいな縫取り物を
見つけて、
「ヤこれは奇麗ですネ。松村さん此はおこしらになすつたんですか。
「どれ、……なにそれは妾ぢやありません、それを拵らねた人は此處に
居るの。

「何處に、何方です。
「此れ、この人なの。
お鉄を指さしてをしへた。　田川は暫らく見較らべて居たが、感服した体で。
「へー、お上手ですネ。
「そんなにほしけりや、今度こしらへておもらいなさいナ。ホヽヽヽ、
ト妙に――あたりまへの語氣でなく云ひはなしたので、田川もまた妙に取つて、そのまゝ話を他へ移した。
「サ、お茶は後にして、始じめやうぢやありませんか。
ト一人が急きたてれバ、又一人が賛成して、
「やりましやう〳〵。敵打ちをしなくつちや。
「サ皆さん組をきめますよ、よくつて……。
繪札ふせてくバり、組をきめた處が、不思儀に田川とお鉄が一ツ組に成つた。

「あなた內を用心して下さいよ。私は外交官になりますから。

一体此の田川と云ふ男は、ある官立學校の學生で、遠からず紳士の仲間入する身分。生れ付て自然昔男の相そなはり、言葉が優しく取りなしがうまいので、レディ受けは極めてよい男。銀子は去年の秋、此男とはじめてナットの家で出會ひ。いとしらしいト思つたのが、執着のそも〳〵。それからだん〳〵親しくなるにつけて、段々と戀慕の念はまし。此人に手を取られて踊る時は足の疲れも覺えず。ワルツの曲の短いのが却て恨めしかつた。これ大きな不了簡、鏡に對しても申譯のない次第だが、さて當人は一切夢中。人に馬鹿にされるのを、はや浮名立てられたと、先の迷惑は思はず、一人でうれしがり。腹の中では追付けからうト胸算用。それを田川は知るか知らぬか。——兎に角美男には生まれたくないもの。

その位だから、先刻田川がお鐵の細工物を褒めた時、——自分は醜くお鐵は美しいだけに、はやくも嫉妬の角が芽出して居たが。今又田川

がお鐵と組に成つたのを見て、益々心元なく。ソッと二人の樣子親へバ密接した膝と膝、よくすれ合ふ腕と腕。これに胸は一層穩かならず。どうかまかしてやりたいものト、思へバ生憎くなもので。田川が一番勝ち、鯨波あげて引さがり、すまして火鉢にあたつて居る。その火鉢にお鐵も亦手をかざして居るのを見ては、腹がたつて〱。……どうかして分けてやらうと思ふから。

「田川さん加勢して頂だいな、まけさうだから。

「へエ、加勢しましやうかナ。

ト云ふたのはほんの氣安め。やつぱりお鐵の側は去らず。疑へバ、お鐵と睦ましさうに話して居るやうなので、今は角も十分に伸びた。只火をふかぬばかり。その一番もどうかかうか濟み、次ぎの組を分けなはすと、今度は田川とお鐵が別の組に成たが、どう云ふ都合か又隣り合つて坐はり。自分は願ひ通り田川とは組めず、むしろ遠くへはなれたのでまだ不平はおさまらぬながらも、しぶ〱取りはじめた。戰方さ

に闌ならんとする時。

‖むかしは物を思はざりけり‖

「サあなたの處ですよ。

「イヽエありません。

ト云ふ中にお鐵はその札が、銀子の前にあるのを見付けて、

「アラお孃樣こゝに……。

手をあてると、

「うそだよッ、

ト云ひながら、譯も分らずその上を押へたが、もう間に合はない。七分三分に引ぱり合て居る中、戰場だから主人だつて用捨はない。

「イヱ此は妾の方が先でございます。

ト遂に引ッたくつたので、サア大變。今まで押ゑて居た嫉妬の火焰、一度に燃ゑ上り。姫はそのまゝつゝぷしてワーッ、聲を立てゝ泣き出した。腰元共はうろたへて、

「お嬢様何う遊ばしたんでございます。
「鐵が……妾の持て居るものを……無理に引つたくつて、こんな妾の手を引かいた。
ト、先刻田川にかきむしられた處を見せるから、無理とは知りながらお姫様の命、嘘にもされず。是非なくお鐵にお詫云はして、直ぐと次へ引きさがらせれバ、姫の涙は直きかはき、また候笑顔作つて歌留多取りはじめたが。一端しらけた坐、容易に取返しが付かず、
「もう遅いからお暇としやう、
ト、男客から云ひ出して、程なく解散。門を出てからも噂とり〴〵。——お嬢様お風邪をめしましたか。

(をはり)

妙七情

蝸牛廬主人

上

正月一日新年の初口說
腹たゝれたり恨んだり

新玉の年こそ空に來りたれ烏の聲雀の囀り、人々の心からとて皆面白く聞るゝ今朝は注連繩動かす風長閑に、日の丸の旗の紅は門松の翠と照り映して、千戶萬戶誰の顏も若水に去年の睡りを洗ひたればや美しく、祝ひ言より他は小言いふ癖ある老人も入齒より洩さず。天地一齊和氣靉靆として霞は罩る賤が小屋まで。

今年初めて屠蘇を一處に祝ふ新夫婦、御亭主は理學者と世に知られし立派な丈夫、まだ四角な帽子被りて金扣鈕御胸に輝やかされし頃より、束髮の孃子是をと思ひ込れし念が屆いて去年の秋の婚禮、共に千代まで八千代までと嬉しき契り其後替らぬ。細君も前髮下て居た時分より內々彼樣な御方にと、いろはにの次の字を小さな心の底に持て居

れば自然男の良い所眼に付き、彼方は數學に精しく、理學に熱心なり、殊更光學上に新奇な大臆説を有し居られて一生其を研究せられんとの頼もしき學者氣質、金錢の欲に薄く、世味に淡く、衣服を飾つて愚人を威す事もせず、交際社會に這入て才を售り名を釣ろうともせず、當世少なき純粹の學者氣質高大な學者氣質、天晴尊とき君子と見て愈々慕はしく、慕はしく思ふにつけ愈々敬ふ心も生じ、愈々敬ふ心強くなるにつけ尙々慕はしく。其人に遠慮なく用吩附られて其用滿足に爲して參らせ、好しと其人に一言云はれなば何程嬉しかるべきと思ひしも緣か。遂に二世の友となり、一身惜からぬ生命掛て我夫の爲に働らき。あはれ眞理の爲に忠臣たらんと豫て願ふ丈夫の志望を助け、我又其忠臣の隨行者たるべき覺悟。揃ひも揃つて浮世風には吹倒されぬ確乎とせし男女が一つ宛齡を重ぬる目出度さ。互に喜びは祝交す眼と眼に余りありて其間に成立つ愛の淸さ。

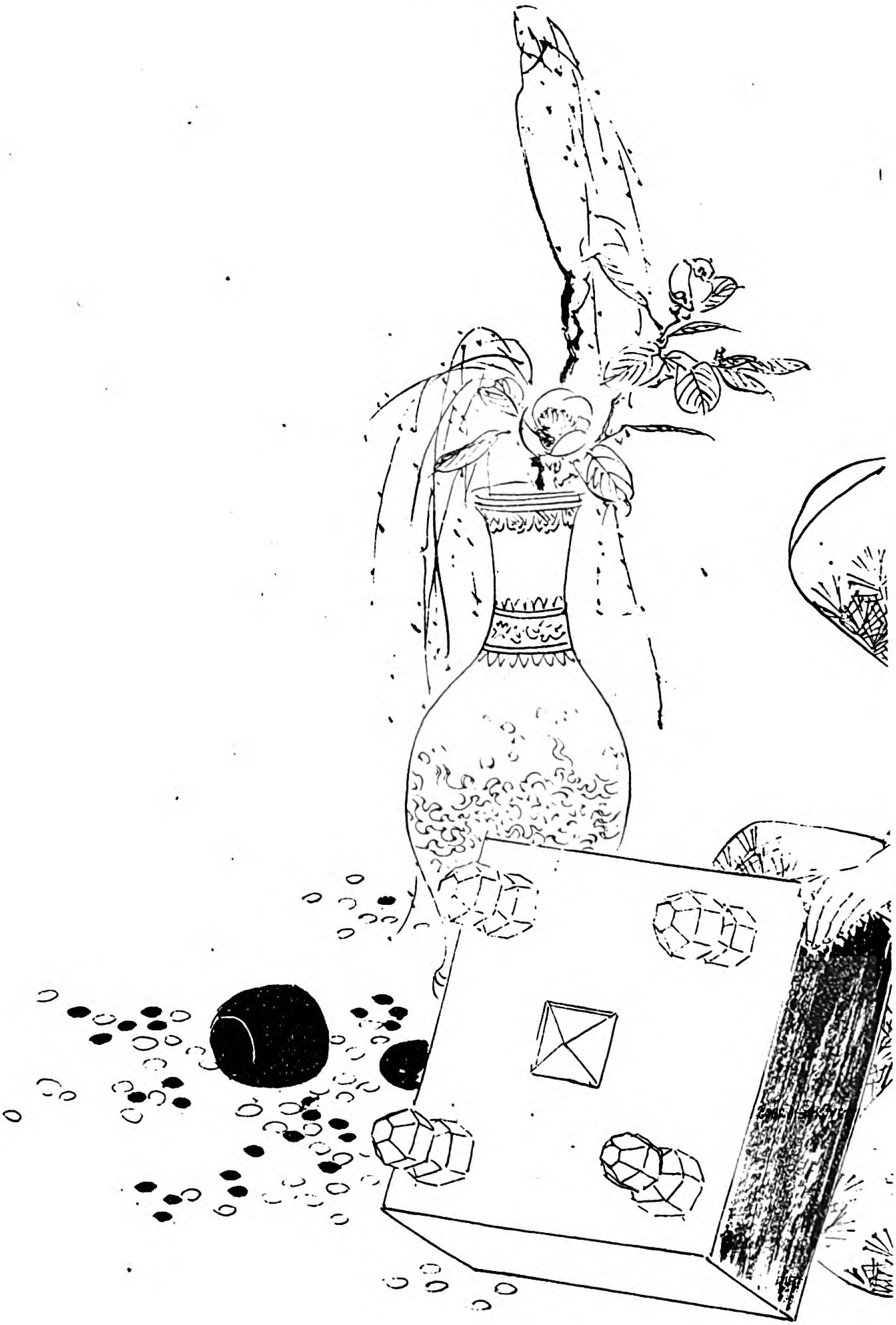
頓て祝ふ雜煮、細君自から御給仕せられて下女の手を用ゐず。御亭

主殊に機嫌麗はしく、素より磊落の性質甘し〳〵と舌鼓打玉ひたる時、臺所の方より通ふ風香氣を伴ふて鼻を撲ちけり。

是ハ又何の香ぞ、良き香なれども我知らぬ香なり、伽羅沈香麝香にあらず龍腦樟腦丁子にあらず、安息香辟邪香に似て異なる所あり況して西洋くさき香にもあらず、是何の香ぞ何を焚きしと御亭主の問に、唇よりも早く答へしは細君の眼兒、言葉よりも早く出しは細君の涙。何がどうして元日早々の哀ぞ。

思ひ切ても曇り聲低く。御不審なさるは御道理、實ハ新年早々恐れ入りました事なれど白檀と薪にして其御雜煮を作り差上たるに甘しとはありがたき仰せ、新年第一目出たき御言葉、白檀を薪木と焚し捨し香りの沙汰はおゆるしなさつて下されといふをも待ず。御亭主急込で、鍋の下に焚くべき白檀のあるべき筈なし、其白檀ハ態々買つたか、若しや過般お前が嫌つたアノ碁盤ではあるまいが、マサカに碁盤を燃しもすまいが、其白檀ハ何處から買つた、ア、ゝ香ふは〳〵、其碁盤は、オヤ、床


桂舟画



の間にある筈だがと立て別室に行き見んとするを止め。其碁盤を見に行るゝには及ばず、白檀の碁盤を燒きました、如何にも過般妾しが御無用になされと申した碁盤、然も昨日とう〳〵御買濟になりましたアノ白檀の碁盤を燒き捨まして製調た御雜煮、是ほど結構な雜煮もござりますまいと。今は却つて心落付き、言葉豊に演立れば。ナニアノ碁盤を燒たか、此馬鹿め、可愛がつてやれば圖に乘て發狂じみた事をする女めと今さら燒し者を取て返し樣もなければ眞赤になつて怒るを見、女は惡な顏隱し得ず、

少時して靜に言ひ出す樣、さりとては情なき御言葉、發狂じみたとは何故、妾し少しも心迷はず、能く〳〵考ねてから致した事。馬鹿云ふな女賢こうして牛を賣り損なふといふ事さへあるに、能〻考ねて倘〻馬鹿氣た事を仕て居ながら我に向つて言葉を返すとは何事ぞ、大枚の金に代て漸く昨日買ひしばかり、未だ碁盤開きもせぬを碎いて薪にせしとは狂氣同然、此間道具屋が持て來たとき買はうといふを其方が止め

たを聽かず、遂に昨日代金渡して買取りしを不平に思ふての仕業ならんが、我を輕蔑した仕様、一眼見しより欲しくてならざりし品、漸く手に入れて充分嬉しく、昨夕の夢にも彼碁盤で一石圍んだ所を見し程なるに能く惨く砕して燒たな、道齋を初め久助吉藏碁敵皆招いで明後日は彼碁盤に向ひ、見事に勝て勝て、充分驚かし呉れんとして居た者を、憎い奴、我樂みを砕いて燒て灰となし、如何に碁中の趣味を知らねばとて、慾を忘れ高貴な品を鍋の中に薫べるとは狂氣ならで何ぞ、尙一面あの通りの碁盤を是非搜し出して來ればよし、其方是非辛配してあの通りの碁盤を求め出して來らば狂氣ぢみた行も許すべし、然なくば決して其罪許すまじ。買はずばまだしも買つた揚句に一石も打たず煙りとされては遺憾千萬、アノ通りの碁盤欲しくて〳〵中〻堪らず、アヽ情ない惜い事をした、アヽ欲い、石を下して石の動がぬ妙碁盤、早く代りを買つて來い、代りが無れば承知せぬ、アヽ欲い。

下

惚れた同志の御夫婦中
まことにめでたういひける

慾念を折られて慾念の倘長じた夫の言葉、聞くや聞かずや俯向居り
し女房膝を進ませ、少し笑を含みて男の顔を見又俯向て。さて〳〵深
くも碁になづませられしもの哉、眞實妾しの能々考へし所の譯も聞れ
ず、一口に狂氣じみたとお言消なさるゝはちとお恨みに存じます、まあ
能くお聞下され、其上にてわたくしの考の誤謬なる事よ定まりしなら
ば幾面の碁盤、買つて〳〵、わたくしの鏡まで賣つても其を需めて、朝よ
り晩まで晩より曉天まで、年中碁に御暮らしなさる樣にも致しませう
に、まあ〳〵能くお聞下され。去年の何時頃よりかあなたが碁の味覺へ
られた其後と申す者は、毎日毎日閑暇さへある時は相手を尋ねての御
圍碁、素より人間氣保養のため遊ぶ事はあたりまへながら、後には強く
御凝りなされて、初めは閑暇ある時に限りしお慰みも近頃は閑暇なき
時にも爲され、相手ある時よ限りしも近頃は相手なくても碁經相手よ、

ア、此手は妙々、此手で明日は適齋に向つたら五目が四目にならう、久助なぞには中押勝を得ること必らず容易と獨りでお喜びなされ、ヘテサテ此手は分らぬ算知の打つ手はどうも意地の惡い手だとか、又は秀碩の打つ手は捗取らぬとか古人まで相手になされての御勉強の効が見えたやら、初段になつたとの御天狗、取るにも足らぬ碁伯などを出入させられ、夫等の男の追從輕薄を眞に受られ、遊民と交はつて得意の御ありさま、夫もよろしけれど平常口癖のやうに言て居られし光學新説を吐て一眞理新たに發揮せんとの思召は御忘れなされしやうに投やり玉ひ、劫とか征とか、綰るとか行るとかに苦慮なされ、數學上に錬り鍛ひられし腦髓を、擴げ玉はゞ天地の大、時間の長さも其中の僅に一小點なるべきに、情なくも其腦髓を僅に三百幾目しか無き盤上に塗り抹されて惜しともし玉はず、大丈夫學を脩むる眞理と相對するのみと言はれし事何日の間にか虛誕と化し、一目の損に眉を皺め腕を組み肺肝を焦して、見ともなき振舞、待た待たぬの小人の爭ひ、高が一場の戲むれの

然も一局の勝負の然も一目の損徳に、堂々たる大丈夫が泣たり笑つたり碁の趣味はどのやうな者か知りませぬが、局外から見れば一目の石に對して喜憂笑哭する男、さて〳〵慨かはしいありさま、天下に對し百億萬年に對して眞理を研究するといふ男に比較て見る時は一つは人間、一つは箱庭の釣人形のやうな者、それを強ゐて釣人形の少しばかり良い形の者になろうとのあなたのお望み、イエまさかに釣人形になろうとは思し召ますまいが、局に向つた時のあなたハ箱庭の中の釣人形同樣、局外から見ては其人の生命ハ高の知れた一目の石の中に住で居るとしか思へませぬ、イエ體に其人の全身の智慧力量ハ一目の石の中にだけ働らいて居るといふ者、世界第一古今第一憫然な者。百姓の身體と精神ハ作物の中にあるといつて良い筈、商人の身體と精神ハ算盤の中にあるといつて良い筈、算盤を投打ち作物を顧みねば商人百姓ハ自殺したと同然、學者の全身ハ何の中に宿らせて良い者か學者の精神ハ何の中に注いで良い者かわたくしが申さずとも御存知にはきまつ

てある事、碁を打たるゝはホンの一時のお遊びにきまつてある事、然し近頃の御執心中ゝ御遊びにはあらぞ、夜ハ囈語にまで其處を盤らせては十目の損になると齒切交せての御繰言、聞く妾の歎かはしさ、最早あなたの一身釣人形同樣になられたかと口惜涙が溢れます、どうか一目の石の中に生活する事をやめて萬古不變の眞理の中に生活する方となつて頂きたく、度ゝ御異見も申したれど良し〳〵と仰せらるゝ計りで少しもお用ゐならぞ。碁の趣味を愛せらるゝ余りの波倘も御心を漂はして碁打を愛せられ、終に碁盤まで愛せられ夫に執着なされて、愈々碁盤を地球となし一目を家となし一番の勝負を無限際の時間の如く見做され、其中に住で生活て五十年を送られべき樣子。人間の歴史の中に名を留むるさへ價値の無い者だと仰せられた事もありながら、何程の名手を出したとて、詰まらぬ一局の碁の歴史の中に功名を爲さんとせらるゝ樣子。傍に見て居るわたくしの心細さ。然し昨日までハ是も全く御慰みの一つ、何も斷然廢られずともお閑暇の時だけよなさ

ればよいと思ひましたが、二十錢も出せバ論語もバイブルも買る世の中ゟ何十圓出して然も年の暮に碁盤なぞ買るゝ世を見ては、惜に行末ハ一目の石の中ゟ住み玉ふべき御了見と見ゑり、情なくも恨めしく、昔しの御心に返りていたゞきたく。一体に熱心強きあなたの事、寐言ゟまで出し碁の事の代りに光學論言るゝ樣にならバ天晴天下億萬年の眞理に對せらるゝ忠臣となられべく、其時の嬉しさ一目の勝を得しといづれぞ、碁も御修業の時未だ年を超ゆるか超ざるに、初段とまでなられし由其も熱心故。此も熱心されなバ、然も五十年生命かけて熱心されなバ成効なきにせよ、負ても面白い事なるべし。今日ハ一年の初の月、今日ハ一月の初の日、一日の初めの朝思ひ切つてわたくしが打破した碁盤、断然此後ハおやめ下さるやうに、あなたが住ハれんとなされし小天地蝸牛の殼同然な白檀の碁盤を打破したハ今年から御心を昔のやうにして頂きたい願ひ、此不吉な碁盤を灰にして祝ふて進た雑煮餅、實ハわたくし心を定めて箇樣とハ昨夕決めながら若しわたくしの心

を汲んで下さらずべと決しかねしが、涙を呑んで、無法の振舞女だてらに恥かしき事ながら、恥を忘るゝも愚な心の誠から。能く察して下さつたなら最一杯召上つてと滔々くと溢るゝ眞實の辯舌、見事なり。男ハ一言もなく、女の手を取て良久しくして曰く。是が鉈を振上られし汐手か。



紫陽花

柳浪子

上枝

花――字を見てさへ美しい觀念を生じ、女――耳に聽いてさへ慕はしい感情が起る。櫻は葉から枇杷よりは優しく、西施は眉から無鹽よりも美くしい。何人も枇杷の花を愛して、西施の色を厭ふものはない筈。でも、色多き奸婦は美しい處が凄く思われ、情深き貧女は、やつれた中に慕はしさが見へて、どんな女にも捨りはなく、枇杷の實は櫻實より珍重される。それを枇杷の實もなくて櫻の色に誇らうとしたり、情薄くして一時の色を飾り、男に好れん事を願望だら――紫陽花の色七度變へても、氣をもむ中に花は散て、庭の隅に見返る人なきを恨むばかり……。

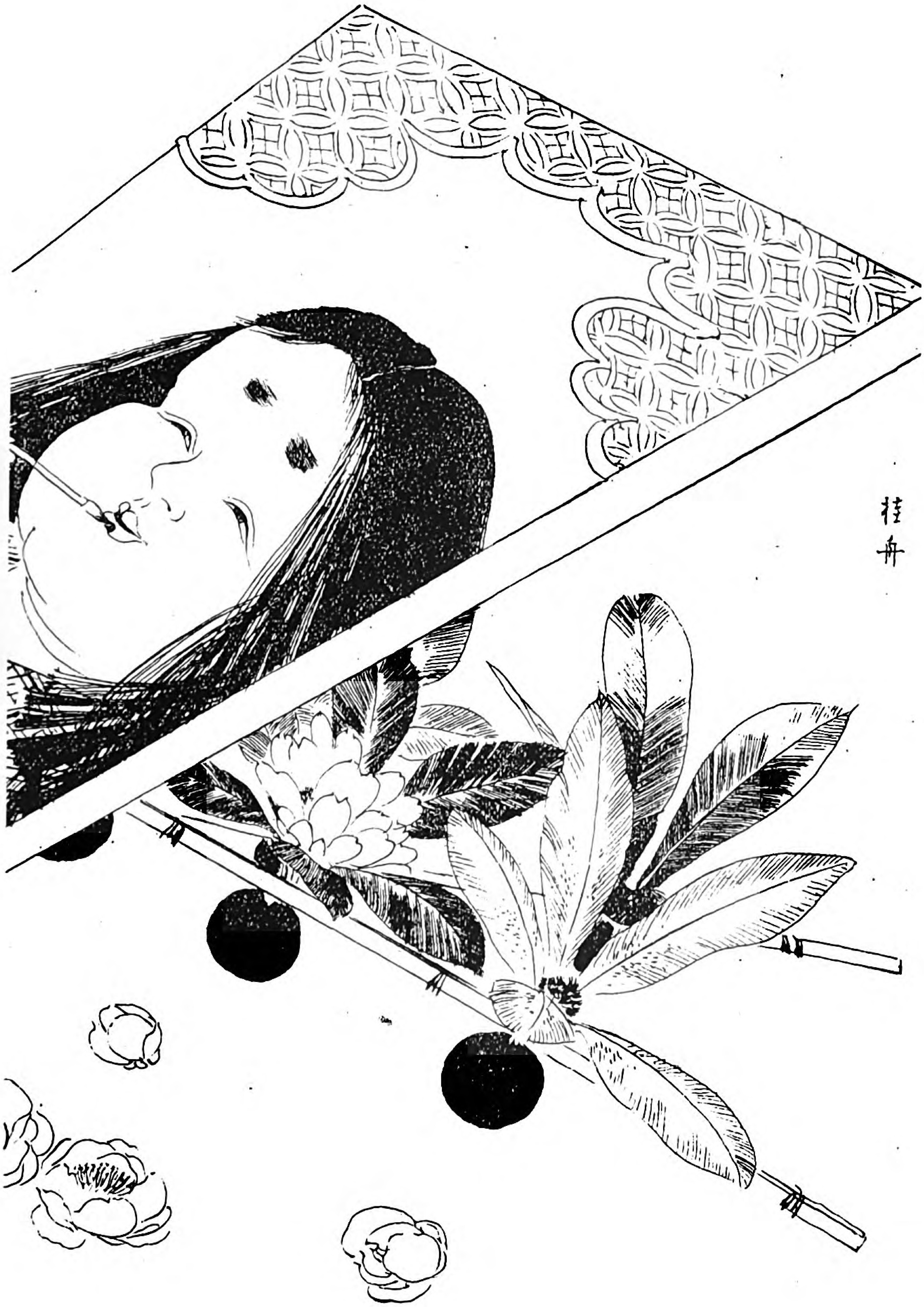
此處は麹町の富士見町五丁目から、牛込見附内の土手際にぬける幅八九尺の小路。屋敷の塗塀と生垣の杉とを兩側にして、人ありて行會

へバ肩をすぼめても、袖と袖とは互の移香に味な氣にもなりさう。其處を通り掛る女の親子づれ。娘ハ年頃十七ばかり、遠見には年弱の十六ともかぶる小作り。髮ハ桃、割に結上げて、態とらしい鬢の毛二筋か三筋パラリとさせ、衣紋を充分にぬいて首を前へ屈めたれバ、右の肩のヌギ黒痣へキと見へ、ある御幣かつぎの婆樣ハ此娘の行末に眉を顰めた事もあるとか。藍辨慶の糸織を上着にして、下にハ派出な幽禪を二ッ重ね、繻子の丸帶のギュー／＼と歩行たびに鳴くのを、其度に自慢さうに撫る手に、白と紫を手綱染にした帶上をなぶる。牛房縞のお召の書生羽織、重さうな肩にこたへて、八幡黒の細出の鼻緒を、後丸にすげた男下駄、ろれを輕さうに引ずる。氣になる程、首を斜めに左右にそらせて、度々背面を見返るハ、おろし立の絹足袋に塵でもついたかと思へバ、さうでもなく其度々に衣紋をつくる。一寸見た處、神樂阪あたりの藝者の、やッと一本にあッたかと思はれる風俗。容色はといへば天晴の美人、それは傘の中に見た目のうつり。白いと見た色は鉛粉の持前。

小さい口は、紅花と鉛粉との配合になれた唇の手柄。秀でた顴骨は男にして見たい程勇まし。鼻は洲濱といふ菓子に似て、摘まゞ一寸つまゝれやう。眉は地藏とかいふので、氣まぐれな新月もあればあるもの。中にも可愛らしい多情な眼は、眼頭キリゝとして眼尻やさしく、一盼能く人の氣を惡くさせるは大したもの。愛嬌のある證據は、さうでもない事に笑を作り、笑ふ度に親父の前でさへ、袖を口にあてるとは云はらしい。此美くしい娘に比ぶれば、母の方の扮裝は餘程劣ッては居るが、光る衣着たくない老女のたしなみか、あたら万筋のお召を、目引させて艶を消し、紬の黒の一ッ紋の羽織に、時代のついた下駄に釣合た、足袋獻上の鴨といはれん事を遠慮したは、流石に年はとりたいもの。ともすれば、娘を背面からながめて、娘の好み私の見立能く似合たと口の中に賞めて、ホク／＼するは娘を持つ親の持前、唯少し念入あは慈愛の深過るのであらう?

此二人は四番町あたりに住む小官員の妻と娘。山下の母娘といへ

ハ、誰しらぬものなき近處にての評判者。昔は歴とした八万騎の一人、あり餘ッた資財も大方はなくして、先祖からの家屋敷、殿様奥様と畏れ崇めた出入の者に渡して仕舞、これも娘が仕込の爲めならと、夫婦とも惜しい顔微塵見せなんだは、昔が昔だけに應揚なと、今に感服話の一つになッて居る。それから去年の春、昔は同僚の今は身分も立派な何某の勸めに、これも娘の爲めと、父親は今年五十八の腰辨當で、赤阪わたりの御役所に、冷飯草履の參勤の身の上。七十二圓の年俸大したものゝ樣なれど、あの評判娘思ふ樣には可愛がられぬ、先月の末父親の英斷で娘の日課の中から、踊りの一節を減したは、保存主義の奥樣の御氣に召さず、毎日の樣に開く内閣會議の、激論の疊の塵埃しづめに、四隣合壁の仲裁仲間も、日番を設けて之に備へて置けな。其會議がやッと濟めハ、跡ハ輕くて寄所、重けれハ鈍帳めぐり、これが仲直りの出來たしるし。こんな母親あまり難有けれハ、近所の娘の中にハ、親々への口答にこれを手本にするものもあるとか。或罪のない神樣が、あの娘を錦繪娘と



桂舟



賞めたら、喜びさうな母親はナンの生意氣あと、唇を反しての恩と仇。

これは作者にもへキとは解らぬ。

今日も足の向方、赤城下あたりをそゝるらしい。

お母さん、遲い事ね。ま少し急がふよ。

マアお待ち、私は其樣に駈出せないやね。

だッて、梅三の初菊を見損なふから。

お前は一昨日も觀たんぢやないかい。今日は切のお染さへ見りや能いのさ

あらお母さんは彼樣事を云ッて。一昨日は一昨日、今日は今日でさアね。お母さんの好な市二郎も大變な評判よ。

さうかね、ぢやア急がふよ。

マア、現金なお母さんだ事。ホヽホヽ。

お前だッてさうぢやあいかね。好きな役者を見たいのは誰だッて同なじさ。お母さん、だッて、オホオホオホ。あれ御覽、何だか暗くな

ッて來たが、まだ割込めやうか。

さうね。お父さんがグツ〳〵お云ひでなきやア此樣事はないのよ。

ねエお母さん。

ほんたうにさ。いつでも後では謝罪くせよ、あんな下らない事をいふから困るよ。これも私とお前の不運さ。さアお急ぎ。

へー、お母さん負ちやいけないよ。

殆んど小走り程な娘の早足には、母親の氣をあせらすばかり。娘は足を止めて振返ッた眉に、自烈體心を見せ、——

お母さん、矢張遲いのね。其辨……。

後先を見廻し聲を押へて、小さな唇よ見せるはニッとした笑ひ。

其辨當は私が持ふよ。

なに能いよ。お前が持ては見ッともないやね。

だッても、お母さんは遲いんだもの。其代りに人通りの多い處よなッたら、お母さんが持つのよ。

あゝ、それじやさうざやう。それ……落しちや不可いよ。

娘は母から渡された辨當の包みを、袖の下に抱ふとして、フッと行路を見た眼の縁をポッとさせ、頬の色との配合をよくし、急に來た路を前にするは——ハテナ。

お母さん、一寸早く持てよ。私しやいや、何だかキマリが惡くッて。

娘の心知るが常なる母にも、今の素振何とも知れねば、急いで請取らうとせぬにもどかしがり、背後に近くなる足音に堪りかね、辨當箱スルリッと地上に落せば、生憎グワッタリ音——アッと思へば、股の下にサッと一杯の汗、それに搆はずチョイ〳〵と手早く衣紋を直し、クルリと前を向て來た人の顔を上眼に見て、袖口を胸にチャンと合せ、袖に涙を打せて早足に三間ばかり、辨當の始末に忙しき母に離るゝ。そして、また振返ッて高見の見物とは、何の爲めか——抔も〳〵。

向ふから來た人は二十二三の色白の美男。南部の羽織に糸織の二枚重ね、外に難がなければ、どんな女に見せても好たらしいといはれ

やう。變な娘と思へバ、近くなッて其顔を覗くに、娘は其前から生垣を見詰めて、その勇ましい頰骨を横顔に見せびらかす。其曲線に見覺へあるか、男は鳥渡點頭て鼻に笑ひ、破れた辨當を持餘した母には目もくれず、姿は屈曲た道に隱れて、もう影も見へない。

娘は我背後に男の足音の行過るを待兼、男の横顔から後姿、恍惚と見送り、姿を隱した塗塀に愚痴も云兼ぬ風情。やッと辨當箱始末した母の口小言に、いくらか心に耻かしく、氣の毒さうな顔付——でも、流石に女は女

こんな亂暴な子ッちやアない。

だッて、人が來たのに持て呉ないんだもの。私やもういや。

いやなら私が持て行うさ。……お前、今通つた男の人を知てるだらう。それ此間……ね。

アーさう、見掛た樣だけど……私しにや一寸思ひ出せないわ。

好い男だね。それ、此間お前を始終……富士本に吾妻を聞に行た時

來て居た人だよ。連の人と始終お前と見てハ、ニコ〳〵しながらコソ〳〵話をして居た人さ、ね。
アーさうね。
あの人ハ屹度お前を何とか思ッてるよ。あれからよく家の前を通るもの。
あら、お母さんは……。
袖を口に當て例の笑ひ。あゝ、娘の前で男の月旦、これ程慈愛深き母が、今一人世にあらバ目付もの。
あゝ、もう暮るのかねエ。お母さん、如何しやう。
此度ハ私も本當に急がふよ。
都合よく來懸る空車。
車屋さん、赤城下まで大急ぎでいくら。
合乗だよ。

九尺二間の棟割長屋の、前一間を半窓にして明をこれに取り黒くなッた入口の格子戸には御仕立物洗はりと書た半紙張の看板が下げてある。窓の下には五十二三の婆様、目鏡もかけず目引の布子を縫掛け、其脇に積であるハ三四組の仕立物。縁喜棚といッて氣取てハ居ないが、形バかりを設けた隣の壁に、古びたれど棹の色艶々とした三味線、諸道具の中にて、家が家、人が人だけにこれが別して目に立つ。それに不審なハ茶道具に富んで居る。急須も三ツバかりあれバ、湯呑も七八人前ハ揃ッて居る。茶飲婆様といふハあれど、何時でもチン〳〵と鐵瓶が賑やかなは、扨一寸疑はしい。探てツ見れバ別に變ッた事もない、仕立物ハ晝間の内職本業ハ若い者が夜遊びの集會所といふだけ。そして、婆様の聲までが若々しく、善くいへバキサクで人愛が多い。こんな家こんな婆様、何處にいッても一町に一ツ位は屹度あるげな。

表の格子戸グヮラリとあく。老婆が針の手を止める中に、這入て來た人はもう側に坐る。

おや、武田さんお出なさい。

直ぐ立て、茶棚の湯呑取りに掛るを、男は手をふッてそれを押へる。

婆さんマア能いよ。僕の綿入はモウ出來たらう。

どうも濟ません。よ。昨夜は夜なべをしても仕立あげる寸法にして置たので御在ますよ。誰も來なからうと思ッてますと大違ひさ。平時の通り皆さんがお出なすッて、藝較べを初めたのですよ。ま、如何程に面白かッたでせう。近所の娘ッ子まで、ワイ〱といふ騷ぎさ。貴郎も今晩は入らッしやいな。貴郎が入らッしやらうもんなら、それこそ娘ッ子はどんなに大騷ぎをするか知れやしません。

弄舌ながら、曲物の櫻の蓋湯呑に咲せて——

ねエ入らッしやいな、え。

武田は湯呑手に取りても、口にはつけず下に置く。

それでは婆さん、明日の夕方までにいゝかい賴んだよ。是非着て行く所があるから。

早立よかゝる。
何處へ入らッしやるの。私がもう十年も若からうものなら、お供をさせて下さいませうね。
其樣處じやない。賴んだよ、いゝかい。
ヘイ〳〵。まアよう御在まさアね。今晚是非入らッしやいよ。待ッてますよ。
答へはなく、格子戶を手荒くピッシヤリ。
あんなありさうな鳥はかゝらないから仕樣がないや、いやゝ馬鹿頑固くッて。
元の坐ゝ返る時、格子戶がまたグヮラリ。
どなた。
おばさん私し。
おや、おむらさん、お上りなさいよ。
今來たのは、あの評判娘の山下のおむら。

いつもお美しい事ね。

あら、おばさん……

例の通りホヽと笑ッて、左右の袖口に口を押へ、老婆の顔へ上眼づかい。

おむらさん、昨夜はお出なさらなかッたのね。今晩は屹度お出なさいよ。今お歸りなすッた武田さんも入らッしやいますよ。

もうおむらの眼はボーッとする。

武田さんッて……知らないわ。

あの方を御存じないの……虚言バッかり。

直此先の下宿屋に居る評判の色男でさアね。

だッて、どんな方か知らないもの。

貴孃とならべたら、それこそ女夫雛の樣でせうよ。

あんな事を……おばさんいや。

急に用ありさうに、今晩を契ッて往來へ出たおむら、いそ〳〵歩行く胸の中には『武田さん〳〵。此先の下宿屋。どの家だらう。』此三つを

絶へず念じて、少しも油斷なき眼に、とある下宿屋を見上れバ二階の欄干に……思ふ方が唯一人―此方を見下してニッコリとした顔の可愛らしさ。ハッと下を向た口の中に、―

おー羞かしい！。



三十日の月

鐵筆將軍

享保の頃、紀伊家の家士に鶴岡傳内といふものありけり。わづかに百俵ばかり領しけるが、常に儉約をのみむねとしたりければ、分に過ぎてこがねしろがね多く貯持ちぬ。思ふよしありとて妻を迎へず、唯下僕一人召仕ひくらし居けるが、同僚のいぶかしむ所なりける。ある年の菖蒲を枕する夜なりし、如何なる故ありてや、傳内は、あまたの山吹色なせるをとり出で、調べ居たりけるが、下僕の軍藏といふもの、チラとこれを見て不思議にもほゝゑみけり。彼は口の中にて、おれ花盗人たらんといひたり。其の夜軍藏は、いつになくまめやかに主の傳内に酒などすゝめ、かたみに心よく打ふしたるは十一時すぎ、乃ち其の頃の四半過なりけり。

夜は明けたり、鳥はなきたり、日は昇りたり。平生早くおきぬる鶴岡どのゝ、今日にかぎりて、まだ戸のあかぬ訝かしさよ、と近きあたりの人

々れ打語ひけるが、柱の日ざしやうやく直なるに、猶起き出でしさまなきは、いよ〳〵心得がたし、と二人三人傳内の家に往きて見たり。裏口の戸開きゐたれば中に入りけるに、いかに傳内は血に染みて床の上に死してあり。！肩に太刀疵あるを見れば、自ら死したるにあらで、正しく他に殺されたるなるべし。常に金かくしたるとおぼしき箱、奥の一間にはや空虚なりてあるを見れば、怨ある者の殺したるにはあらで、正しく物盜るものゝ殺したるなるべし。内より戸開けしさまにて、下僕軍藏あらざれば、外よりしのび入りし者の所業にはあらで、まさしく軍藏の爲せしものあるべし。是等の想像はたちまち往見しものゝ胸にうかびぬ。

さてこのよし直に目付中へ訴へければ、たゞちに撿使きたりて撿視せり。撿使もおなじく軍藏の所業と考定めたり。かれ不届のしれものなり、さがせ、とありて、野の末山の奥までも、尋ねにたづねけるが見當らざりけり。さもありぬべし、軍藏は他國の者にて渡り中間なりけれ

ば、今は何處へにげゆきしやもはかりがたきなり。

それとまれ、鶴岡傳内はあはれなるものなりける、親類もなければ緣者もなく、誰ひとりあだうたんといふものもなく、俗にいふ殺され損とはなりぬ。さるにても妻は持つべきもの子は設くべきものよ、とは目付中の取沙汰なりけり。噂のいまだ果てぬに、御目付中へ、そのいかめしき願書きたりぬ。開き見れば傳内の最親しき友なりし小姓組の一人清水新三郎より、常々兄弟の如くに思ひもし、思はれもせし傳内の仇うたんとおもへば、御暇たまはる樣、よきにねがひまつる、との文意なりけり。かゝりのものは打驚きながらも、其の信義あるに感じたりけん、願のとほりにはからひたり。

數日を經てお暇たまはりたれば、新三郎はたゞちに支度とゝのへ、さて思ひけるは、彼の軍藏は物のいひざま東なまりなり、かならず東の者なるべし、ひとまづ東へくだりて、水火の中をもさがし求めん、と直に江戸表へ下りたり。既に江戸につきて、淺草藏前なる瓦町といへる處に、

いさゝかなる家をかりうけ、名をも改めて岩佐仲といひ、年頃慰みに覺ゑし尺八を指南して、ひそかに軍職が行衛を搜しける。新三郞はもと信仰心などつゆほどもなき性質なりけるが、今は己が家にうや〳〵しく神棚などまうけて、朝夕に伏拜みけり。そは片時もはやく軍職を見出ださしめたまへ、とてなりき。

ある日新三郞は、平生したしくうちかたらふ友どちに誘はれて、淺草寺觀音をはじめとし、隅田の河原をあちこちと、みめぐりの社にいたりけるは、はや黃昏時なりけり。いづれも、これより新吉原の五町を見物せんといふ、新三郞はいなみかねて行きぬ。京町二丁目山本助左衛門といふものゝ見世先まで來りて、いづれも、爰にてあそばんといふ、新三郞又いなみかねて登樓ぬ。のぼりて勝山(今の勝山といふ女結びはじめし格別風流の遊女)といふ傾城の新造秋篠といへるに逢ひにけり。かりそめのあだ枕とおもひしに、互に逢馴れて、ふかく契りをかはし、數通の起請藥守の神の末かけて、かはらぬなかとなりにけり。

是より新三郎は雪の夜も、風の日も、いとまさへあれバかならず秋篠をおとづれぬ。あるときふたりして、四方山のものがたり、越方行末の事など、こゝろよく語ひ居る中、新三郎は急に愁をふくみぬ、何事か思ひ出したるものゝ如し。秋篠はつねよりも一層やさしくあしらひたり、しきりに之を慰めんとするものゝごとし。然れども新三郎の愁はなかく〳〵に解けんともせず。秋篠は容を改めて、君は何故あれバ斯くふさぎたまふや、斯かることは實に往々あらるゝなり。妾おもふに君には、何かこの世に他人にはもらしがたき大望のおはすなるべし。然れど妾をも尚他人と思さるゝか、妾は君を他人とおもはざるに、と泣きつゝいふ。新三郎もさすがにあはれにおぼえけれバ、われも卿を他人とは思はざるなり、と答ふ。秋篠、已に他人と思ひたまはずバ、など御心の中をあかしたまはざる、あかして謀りたまはざる、膝とも談合といふことさへあるに。新三郎、されど。秋篠、されど如何なるにや。新三郎は問ひつめられてしばしものいはでありたりしが、思ひきッたる体にて、

まことわれハ卿の察するごとく、いさゝか所望あるものなり、それはか〳〵なり、かく〳〵なり、と義兄ともいふべき傳内の仇なる、軍藏といふものを搜りつゝあるよしをいふ。又いふ、斯かるのぞみある身にしあれば、たとへ卿とたのしくかたらひつゝあるも、ふとそを思ひだすたびに、心この方にのみ惹かるゝなりと。又いふ、此の廓ハいろ〳〵の客の入込む所なれバ、種々の人をや見め万一それとおぼしきもの見たらんには、直に知らせたまへ、この軍藏ハかゝる風体の男にして、かゝる年齢の者なりと、くはしく告げけれバ、秋篠ハ、かならず力をつくさんといふ。尚それよりつきはかりつゝありける中、その夜も早明けて、淺草寺のかねに促がされ、惜しきたもとをわかちたり。

その後やがて半年もすぎしとおもふころ、秋篠の主人山本助左衛門ハ其のくつはの師なりといふ石橋六藏といふものを、わが家へ伴ひきたれり。秋篠これを見るに彼の軍藏に姿よく似たれバ、尚つく〴〵と打みるにいよ〳〵たがはず。ござんなれ、これなるべしと直に書状も

て新三郎に申遣はしたり、はや〳〵御越しさふらへ、見せまゐらすべき人こそあれと。新三郎は箸なげすて、いろぎきたりて秋篠に對面しければ、秋篠しか〴〵と告ぐ。とまれ一目見んと、新三郎いさみて立上らんとするを、秋篠とゞめて、かならずせきたまふな、今は奥の間にて大勢入乱れての酒宴最中なり、彼は今宵爰に一宿するはづなれば、君もとまりたまひて、ゆる〳〵と見とゞけたまふべし、わせりて他にみとがめらるれば、一大事にこそ、といふ。新三郎に其の意にしたがひぬ。

翌朝六藏風呂に入ると聞きて秋篠、新三郎をともなひ、もの〻すきまより伺はしめたり。新三郎みてたちまち刀のこひぐち握りつめしが、まてしばし、場所よからず、却て仕損じの基なり、最早周章ることなし、と心をしづめて秋篠が室へ入り、前の軍藏が歸るを遲ちけり。二時三時ほどへて、軍藏はいよ〳〵歸途に就きぬ。新三郎しづかにおとつきゆけば、端場町瓦燒新續屋の内へ入りたり。爰ぞ彼れが住居と見ねければ、新三郎ひきつゞき内へ入り、おら〻かなる聲にて如何に六藏以前の

軍藏、兄鶴岡傳内の仇おもひしれ、と呼びかけたり。
軍藏うちおどろきて、こは心得ず、傳内は弟はなかりしに、といふ。新三郎、さればとよ、汝も見覺づらん、われこそは傳内が義弟清水新三郎なり、と名のりて刀に手かけたり。軍藏は、ナニあの小姓めが、小僧めが、と早くも胸に冷笑ひ、さてしばしと押留めていひけるは、尤もなり、尤至極なり、立上りて勝負せん、さりながら此處は市中にて場所あしかり、御邊とわれ戰ふも、人々よりつどひて勝負させまじ。そのうへ近處の者に世話かくるも益なし。見たまへわづかのあの森は、橋場の總泉寺なり。夜に入り彼處のひろき境内にて出逢ふては如何。新三郎きゝて、尤神妙なり、然らば我も一度歸りて、見苦しき品々取片づけ、そのゝち總泉寺大門にて待つべし、必約なたがひそ、といへば、軍藏わるびれず、いかでにげ走るべきと答ふ。新三郎は其の詐りならざるを知り、淺草の我家へかへりて、みぐるしきものども取仕舞ひ、よきに支度とゝのへ、日の暮るゝこともどかしく、總泉寺の鐘まだ七をうたざるに、はやての大門に

到りぬ。いかにもいさましく見ゑける。
さて新三郎は大門に久しくまちゐたりけるが、軍藏はきたらず。こは欺かれしかと噛みくだくまで齒をくひしめたり。されど來らざるも道理、日は尚たかし。春の日永きことけふこそしりぬと、打つぶやきながら、ひとたび山本が見世へゆき、秋篠に對面して名殘をもせんとて、ゆきぬ。あひていひけるは、卿のおかげにて仇人を見出だし得たるが、今日のたそがれ時より待ち合せ、總泉寺の境内にて勝負する約束なり、運は天に任する所なれば、もし打負けて命を落さんもはかりがたし。萬一さすれば今までの契りかはらず、命日〳〵には香花にても備へくれたまへ、他人の千部萬部の讀經よりも、卿が一遍の念佛こそはるかにうれしけれといふ。秋篠きゝて空うつむきながら、おかしき事のたまふものかな、凡そ來る客毎に勤めのならひ、又も呼ぶべし〳〵とて、つくすは手練手管、偽いふは妾にかぎらず、すべて傾城遊女の常。遊女の起請をまことゝ思すは、愚なることのかぎりなり。今夜人と勝負したまひ、切

られたまふてもそれまでの事、妾いかでかゝはらん、逢ふ客毎に命日の精進するものならバ、傾城の酒呑む日はあらじ。おかしきことのたまふものかな。とて如何にもさげすみたる面色して、打笑ひながら去りにける。新三郎あきれはて、にくき傾城めがことばかな、おのれよくも今まで欺きしよ……されどわれ亦よくも今迄いつはられしよと、思へバ今更裏はづかしく、急に其場を立ちさり、空とぶ鴉ともろともに總泉寺門前の松原指していそぎけり。

入相の鐘はひゞきぬ、遠山はかすみぬ、やう〳〵に人跡たえぬ。新三郎は今や軍藏は來らんかと、幾度か掌に唾して待ちける。しばし經て二三十歩も後に見ゆる人影、新三郎は眼はりさくまでに見つめたり。されど人影は此處へ來らず、いらだちてよくみれば、女子にて寺の本堂へ行くものなりき。いともどかしく覺えたるをりしも、來り居しや、と現れ出たるは、見まがふばかりすさまじくいでたちたる軍藏なり。新三郎疾くより待ちうけたり、神妙にも來りしよな。いざといふより早く、雙方

たちわかりたり、刀拔きはなしたり、切むすびたり。軍藏はもとより剛の者、そのうへ劍道は人に指南する位に心得たるものなれバ、新三郞はやゝもすれバ受太刀となりけり。いつの間にか蒙りぬ額に一太刀、創淺けれども血汐は流れぬ。嗚呼、にくむべき軍藏は今や新三郞を斫りころさん、憐むべき新三郞は今や軍藏に斫り殺されなん。嗚呼、天道は是か非かといふべきの瞬間、軍藏は後の方より何者にか切りつけられぬ、はッと顧るところを新三郞すかさず、たゝみかけて、ふみこみて、竟に軍藏を切伏せたり。とゞめさしてはッと息つき、誰なるぞ助太刀たまひしは。後の方より、まづ〳〵めでたかりしよ、といひつゝ出で來るものを、見れバ　秋篠！　新三郞打おどろき、卿は先刻對面せし折には不實の詞ありしよ。秋しのいふ、わざとはげましまうさんとて、あいそうつくして言ひぬ、していとゞ心元なく覺え待りしまゝひそかに廊を迯出でゝ、此處まで來り居しなりと。新三郞、されバ軍藏の來る少時まへ見えし人影は卿なりしよと、覺えず涙。秋しのも泣く。

かくてあるべきにあらざれば、直に町奉行稻生下野守までそのよし訴へぬ。町奉行は委細に吟味して、さて清水をば紀伊家へ渡しぬ。程へて紀伊家より山本へ金子下され、清水が妻にとてありしのをば引取りに來にけり。其の後夫婦むつまじく男子の二人までもまうけて、長男は鶴岡傳內の家を相續させ、鶴岡傳五郎といひ、二男は清水の家をうけて、又清水新三郎といひき。

本號の附錄には小生かゝぬつもりで居しに、急にかゝねばならぬ事となりたれば、數時間の暇をみて……………アーろく〵斷りがきさへ作るひまなし。

明治二十三年一月一日前二日、

鐵筆將軍志るす。

